
愛しいとおもう

りょん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛しいとおもっ

【Nコード】

N0035U

【作者名】

りょん

【あらすじ】

たった一瞬のことだった。一目惚れだった。

それから8年間の間ずっとくすぶっていた初恋は、どうやら叔父にバレバレだったらしい。彼の国に嫁げるようそれとなく叔父が父に進言するも、父はある条件をだした。「身分にとらわれずお前を愛するような懐がでかいやつじゃないと娘はやらん。」ちよつとまでどこの親ばかだ。と思うも、叔父は楽しそうに準備を進める。母親も乗り気だ。一般的な茶色に髪を染め、低い身分の貴族に偽の籍をおき、側室候補としていざまいる。ほんの一部の人にしか心を開か

ない王と無表情の女の甘い恋愛ストーリー。

第一話 初恋（前書き）

はじめまして。自分が読みたい設定をつめこんでしまいました。よろしかったらのぞいていってください。

第一話 初恋

それは一目惚れだった。

でたくもない王国創立祭にでて、多少なりとも不機嫌だった私は、お祝いをしにやってきた各国の王族たちが次々と私たちに挨拶するのを横目に何気なく周りを見渡し、ふと同年ぐらいの男の子に目を留めた。

ただ単に同年そうだなと思ったことと、とても不機嫌そうな顔を隠しもしていないことに興味をもったからだだった。

私はこのとき11歳だったのだが、この年になると、自分の態度が周りにどんな影響が与えるのか自然と分かってくる。だがそんなことを微塵も気にしていない男の子が、妙に羨ましかった。

(私もこの創立祭は面倒っておもってますよ)

今、私と彼は同じ感情を共有しているみたいでくすぐったかった。

今さっきまで不機嫌だったことも忘れ、少しずつわくわくとさえしながら、彼を観察し始めた。

といっても常日頃無表情な私は、不機嫌に思っついようとわくわくしようとして、その感情を悟られることはめったにない。唯一家族だけは何気なくわかるらしいのだが。

妹も私と同じようにあまり感情を表に出さないので、よく両親やメイドたちが困った顔をしていた。

彼は、深い蒼色の少々短めな髪をぐしゃぐしゃとしながら隣にいます。お付きの人？らしき人に、なにか話しかけているが、お付きの人はニコニコしながら頭をふっている。

イライラとしている男の子をみて、お付きの人は不意に誰かをよんだ。すると男の子はわたわたとして、おつきの人が見ている方向へ走っていく。

そちらに目を向けた瞬間、私は周りの景色がキラキラと輝いている

かのように見えた。

さつきまで不機嫌顔だった男の子が、とても、とてもきれいに笑っていた。

弟、なのだろうか。3歳ぐらいの可愛らしい男の子がよたよた歩いてくるのを、満面の笑顔で出迎えている。

表情の鮮やかな変化に思わず目が奪われた。

あんな笑顔をしてみたい。

思わずそんなことを思うほど、その笑顔は魅力的で、引き込まれるように。

鼓動が早くなるのを感じる。顔が赤くなっていくのを自覚すると同時に、男の子の顔を見ていられなくなって思わず目を伏せてしまった。

どきどきと、胸が高鳴っている。

この現象はついこの間、メイドのアンナに教えてもらった。

ある本を読んでいるときに、その中にかいてあった「恋に落ちる」とはどういうことなのかを聞くと、アンナは満面の笑顔で

「胸がドキドキ高鳴って、その人の顔が忘れられなくなって、その人のことしか考えられなくなるんですよ」

と教えてくれた。どうやらアンナも今恋に落ちてる最中らしい。

この時だけは、私はいつもの無表情が崩れていた自信がある。どうせ、周りにはみんな両親のほうに顔を向けているので、だれも気にもしていないだろうが。

少したつて気持ち少し落ち着いてから、横目でまだ同じ場所に男の子がいることを確認し、自分の横で退屈そうにしている叔父様に男の子のことをきく。

すると「ははーん・・・」とニヤニヤされたあとに、隣の国のヴィングリー国の王子だと教えてもらった。

ヴィングリー国。

緑と山に囲まれた国でも豊かだが、それゆえに付近の国から目を付けられているらしく、それに対抗するために軍の規模も大きいとこの前の授業で習った。

その国の王子なのかとぼんやりと考えているうちに創立祭も終盤となり、次々と貴族や王族たちが帰っていく。

はっと気がついたときには彼も、付き人も、彼の弟らしき人もいなかった。

ああ、いつてしまった。

その時はとても後悔したのを覚えている。

どうせ話しかける度胸もないくせになにを後悔するというのが。

それから8年。

私は初恋を忘れることもできず、しかし行動を起こすこともなく、たんとんと生活を続けている。

ただ、初めての恋をしたあと、叔父が面白半分で教え始めた護身術

に私はすっかりはまってしまい、気が付けば剣と体術で、騎士団の男たちをあしらってしまうほどの実力をつけてしまった。

なにをどう間違ったのか……。謎だ。

そして今日、私は嫁ぐ。

初恋の彼のもとへ。

第二話 嫁ぐ？

始まりは叔父のこの一言だった。

「シルヴィはまだヴィングリー国の王子が好きなの？」

この日は、諸各国の動向を監査するという建前で、様々な国を放浪してまわる自由気ままな叔父が一年ぶり帰ってきたため、稽古をつけてもらっていた。

叔父のこの言葉は、私をどうようさせるには十分な言葉だった。

「隙あり!！」

その叫びと共に、木刀が頭にあたる寸前で止まった。

「な、なななな。」

私は叔父に負けたことすら気付く余裕もなく、なんで知っている！と叫びそうになったが、そういえば王子のことを教えてくれたのは叔父だったと思い出して脱力した。

「うむ。シルヴィはまた強くなったね。ちょっと冷や冷やしたよ。」

あっけらかんにつぶやく叔父・・・私の父の弟である・・・は私の驚きぶりに、私がまだ彼のことを好きなのだと察したらしい。

「恋歴8年か。年季はいつてるね。」

ほっといてくれ。

「君たちが恋に落ちた瞬間を見た僕としては、なんとか君たちをくつつけたいんだけどね。あっちもいるいろ大変だったみたいで、僕としてもこんな時間がかかると思わなかったんだよ。」

「?なにをこちゃこちゃいつているんだ?」

なにやらぶつぶついつている叔父についていけず、滴る汗をぬぐうためにタオルをとりに行く。

風呂でもはいりにいくかな・・・と思っていると、

「けどやっとなは19歳にしてお嫁にいけるよー。よかったねえ。」

叔父が突然爆弾発言をした。

「・・・・・・は?」

普段無表情な自分の顔がぼかんしているのがわかる。

「いまヴェイングリー国が側室候補を募っているんだ。王が国同士の

戦争をなんとか終わらせたらしくて、周りの大臣とかが、今度は世継ぎ世継ぎうるさいらしいよ。まだ王になって2年なのに色々大変だよね彼も。」

まだ頭が混乱していて、でもふと疑問が浮かぶ。

「・・・なぜ候補？」

「王と大臣が互いに譲歩した結果らしいよ。王はまだいいと言い張って、大臣はとりあえず側室だけでもと縋り付いて、結局大臣の粘り勝ち。とりあえず王が気に入った人を側室なりあわよくば正室なりにしてくれたらよしとなったらしい。あそこの大臣たちも悪くない人たちなんだけど、いかんせん王への愛が強いんだよね。うん。ちょっと曲がってるけど。」

彼が王となって2年。即位してすぐにヴィングリー国は両隣の国から攻められ、それがようやく最近になって収まったらしい。うちの国も影響が過多になりすぎない範囲でヴィングリー国を支援しているのは知っていたが。

私の国は、覇貢する国を簡単につくってはいけないから。

本当はすぐにも飛んでいきたかった。なにか力になりたいと。

けれど私はこの国の姫で。彼とは一回も接触すらしたこともなくて。そんな状況で動けるわけもなく、ただただ悔しい日が続いた。

戦乱がおさまったことは安堵していたが、次は后か。大臣たちの気持ちはわかるが少し早急すぎる気もする。

彼は大丈夫だろうか。

ちゃんと休めているのだろうか。

「ほらほら、恋する乙女の顔になってるよ。そんな顔はほかの人にみせちゃだめだからね。」

私の無表情から表情を読み取れる人なんてなかなかいないし、第一そんな顔をした覚えもない。

むっとしながら叔父を見つめると、そんな私の考えを読み取ったのか

「初恋しかしたことないから鈍感なんだろうねきっと。」

といわれた。悪かったな初恋歴8年で、未練たらしくって。

「というかそこでなんで私が嫁ぐ話になる？」

「うーん、まだ今から兄さんに提案するんだけどね。シルヴィだって19歳だからそろそろ結婚の話がでないと、さすがにおかしいだろう。大丈夫、シルヴィがずっと彼のことを好きだったとかは言わないから」

まあそれは最近不思議に感じていたが。

私が武術を習うことはなんとか黙認した両親も、結婚にはいろいろいってくるだろうなと思っていたら、なにも言ってこないし。

武術を習わせてくれるから、ほかの作法も少なくとも、嫁にだすことに両親が恥ずかしく感じない程度には頑張ったつもりだ。

妹のシェリーには負けるが。

彼のもとに行ける。

それはシルヴィを甘く痺れさせる。

それは恋に落ちてから何でも願ったことで夢のような話だった。

けれど口下手な自分は、ただでさえ自分が恋に落ちたことを誰にもいえず、恥ずかしさともんもんとした思いをずっと心の中にとどめてきた。

でも、叔父は私が男の子のことを聞いたときから、私の恋を分かっていたとは……。

今更ながら、恥ずかしくてうわー！としてくる。

「はいはい。脳内会議はそこまでね。兄さんここにいこー。」

「え、今から？」

お風呂入りたいし、着替えてから……。

「今のふわふわしたシルヴィを見せたほうが効果あるしね。」

叔父がぼそつといった言葉の意味が分からず、私は叔父に背を押されつつ、父のもとへと向かった。

彼に会えるかもしれないという期待から、少しだけ頬が熱いを感じていたが、とくに自分の表情にかわりはないだろうとおもっていた。

（うわあシルヴィーの体中に花が咲いてる。）

と叔父に思われていたことも、叔父でさえ気付く私の変化に家族が気づかないはずがないことも、なにも気付くことなく、私ははたから見ると無表情のまま、心はつきつきで父のもとにむかったのだった。

第三話 父よどうした

「だめだ！」

一喝。父の声が部屋に響く。

父が大声をあげるほど反対することに驚いてしまう。

さすがにそういった話は今までなかったため、父がどういう反応をしめすかわからなかったが、ここまで怒るほど、私は両親にとつて嫁にだすと恥ずかしい存在なのだろうか。

「ちょっとあなた、シルヴィの周りのお花がしぼんでるわよ。あなたのせいで。」

母が意味不明なことを父にいうが、父には通じたらしく、ぐっとだまりこんでしまった。

かわりに母が私の方をみて優しく問いかける。

「シルヴィは側室候補としていくことに納得しているの？」

優しい瞳をみて、私はただどしくもいった。

「・・・はい。父と母が許されるのであれば。」

私はただひっそりと彼を見ることができれば、それでいい。

お嫁さんになりたいと考えたことはなかった。

自分が誰かの妻となる未来を想像したこともなかった。

いつかはするだろうと漠然と考えていたし、こんな面白みもない自分を娶ってくれる人がいるかもわからない。

ただ、この8年願ったのは彼に会いたいということだけだった。

「……いいだろう。しかし一つ条件がある。」

真剣な顔で父は私を見据えるので、私も自然と背筋を正す。

なにか、問題でもあるのだろうか。

「そいつが、身分にとらわれずにお前を愛するよつな、懐がでかいやつじゃないと私の娘はやらん！」

鼻息荒く宣言する父をおもわずぽかんと見つめる私。

あらあらと笑っている母。

そうきたか・・・とニヤニヤしている叔父。

「あ・・・の、私はただ候補として参加するだけですし、この国からきたってことは隠すつもりなので、娶られる確率は低いかと・・・」

私の国はちょっと特殊なので、この国の姫がだれかの側室候補になるなど知られたら、ちょっと騒がしいことになってしまう。

それだけはさげたい。彼に迷惑をかけるようなことはしたくない。

「いや、そのだな・・・つまり・・・」

いやに歯切れが悪くなる父。その父の言葉にかぶさるように母が声をあげた。

「シルヴィ、わたし思いつきましたわ。」

母がキラキラと目を輝かせていつてきたことに、少しだけ嫌な予感がする。

「身分が低い貴族になりすまして行ったらどうかしら。」

ああ、母の暴走が始まった。

母は小さい頃から、「みぶんさまえ」やら「すれちがいのちあまあま」などが好きらしい。

「身分が低いほど障害があるから、それを乗り越えるほどの人だったら、この人も結婚を許すでしょうし、シルヴィもだれかの貴族の名前を借りるつもりだったんでしよう。だったらいつそのこと身分が低い貴族としてのりこんでいきなさい。」

「まあ、義姉さんの少女思考はおいといて……いい考えだと思っよう。シルヴィだったら多少のいざこざもまとめあげる技量をもってるし。」

多少のいざこざってなんですか叔父よ。

母も目をキラキラさせないでください。

父もつむ。とかいってないでなにか言ってください。

「ならシルヴィの髪は目立つから一般的な色に染めて、服も地味目なドレスをそろえて、身分が低い貴族の戸籍を新たにをつくってああ忙しくなるわ。」

いきいきしている母は可愛いのだが、私が口をはさむ隙もなく次々と決められていくため、どうしたものか……とため息をつく。

「行けることが決まってよかったね。これから楽しくなりそうだと叔父が私に話しかける。」

妹がこの場にいたならば、もう少しましな話し合いができただろう

に。

そう思ってもすでにあとの祭りである。

「シルヴィはさ、会っただけで満足できるの？」

叔父はふいに小声で話しかけてくる。

「?できる・・・と思うが。」

今まで思ってきたのは会いたいという気持ちだったのだから。

はてなマークを浮かべる私の頭をゆっくりなでながら

「・・・恋愛はそんな簡単に満足できるものじゃないんだよ。」

と叔父は意味深な言葉を残すと、ゆっくり部屋から出ていったのであった。

その言葉がわかるのは、彼と会ったのちのことである。

第四話 ついにきたる今日

そして今日、とうとう側室候補としてヴィングリー国に入った。

準備はあつという間だったというか、主に叔父と母がノリノリで進めていくため、なされるがままだった。

戸籍を偽って他国の側室候補になるなど、普通の国なら許されないだろう。

ただ、この国は、なんとというか、許される・・・というわけではないんだが・・・なんといいのやら。

まあとにかく、鍛錬する暇もなく礼儀作法を見直し、地味なドレスをつくるために採寸をし（なにか違うような）、新たに戸籍がつくられた貴族の設定を頭にたたきこみ、父からなにやら細々といわれ（嫌になったらすぐに帰ってこい。すぐに跡形もなく消してやるから。などと）薄ら寒いことをいわれたので、絶対に父には報告などできないなと思いつつ、今日がきた。

今日会える。

やっと会える。

ちよつと型の古い馬車に乗り（わざわざ作らせたらしい・・・）、
王城前の門をくぐる。

私の国からヴィングリー国まで二日かかり、その間、緊張にどくどくと熱くなる体を抑えきれず馬車をとめて休憩している間、森にて居合切りをして、気持ちを落ち着かせた。

これから側室候補となる女がすることではないと分かっているが、これが一番落ち着くのだ。

そして門を抜け、馬車を降りてから、大部屋に案内されるとそこには

女性の大群がまっていた。

顔が思わず引き攣る。

みんなきれいに着飾っていることからどうやら側室候補として集まったらしい女性たちだとわかる。

それぞれ顔見知り同士でグループが出来ているものの、笑っている顔から想像もできないほど辛辣な言葉が行き交っている。

ここはすでに戦場なのだ。

けれど王はどこに？

と周りを見渡すと、ふいに視線を四方から感じた。

視線があった方を振り返ると、そこには女の人たちの、差別剥き出しの表情があった。

「なにこの地味なドレス。流行遅れどころじゃないわよね。」

「いかにも身分が低い貴族が、精一杯背伸びしましたーって感じ。」
すごい、母のこのドレスのコンセプトを言い当てている。

なにやら、蔑まれているのは感じるが、いかんせんなにも感じないのはいけないのだろうか。

いつも荒くれ共と鍛錬しているせいか、そういう女たちの嫌味などが通じないというか、初めて言われたので逆にすごいと思ってしまう。

こういう経験はやはりしないといけないと思わず感じてしまった。

上に立つ者はまず、どんな立場をも知り、その立場に立って考えるのだと父は常日頃話していたのだがそういうことなのだと思える。

やはり、今回の母の提案はよかったのかもしれない。

そう思っていると、いきなり、女たちのおしゃべりが静まった。

なんだ？と思って振り返ると、部屋の中で一段高く作られているところに、誰かが座っていた。

あ、それは

ぶわっと鳥肌がたつかと思った。

彼がいた。

8年という年月を経て、たくましく、とてもかっこよくなった彼が・
・・。

王としての存在感があり、彼がいるだけで空気が重くのしかかる。

ああ、あの男の子はこんなにもすばらしく成長したのか。

あまりにも長い一瞬だった。

「よくぞまいった。側室候補の方々。ごゆるりとすいませよ。」

その声は、低いバリトンで、聴くだけで体がぞくぞくとしてくる。

何ども想像した男の子の声は、成長した男の声にたちまちかき消される。

ここからでは小さくしかみえない王はそれだけいうと、さっと立ち上がり、ふうつとため息をついて部屋からでていった。

やがて、女たちはそれぞれの部屋に侍女たちと向かう。

「そろそろ行きませうか。」

と同行してくれたアンナがどこすために部屋へと案内されるままに進む。

この気持ちは一体何だろうか？

頭がぼうっとする。

恋に落ちたとき、鼓動はどくどく音を立てていた。

今は成長した彼を思うたびに、とくんつと大きく胸が鼓動をうつ。

会えるだけでよかった。

8年も会うことなく、ただぼんやりと初恋の人として思い続けた。

会えたらなにか、このしがらみともいえるものから開放されると思っただ。

なのに、

もっとしがらみが、からみついたかのように思えるのはなぜだろうか。

第五話 誤解

私はあの日から少し変だ。

会えるだけでよかった。

それだけで、よかったはずだったのに、私はもやもやとする気持ち
が抑えられなかった。

あの日から一週間。

私は彼にあの日以来あっていない。

レンゲルド・ステインボルグ

彼の名前だ。

自分の国にいたときは、この名前を口にすることはほとんどなかつ
たし、心の中でそつと名前を復唱するのみだった。

しかし今は

「レンゲルド様は昨日私の部屋にこられたわ。」

「まあ、私は昨日の昼にレンゲルド様からじきじきに声をかけられましたのよ。」

「私は今日の夜のお約束をしていただきましたわ。」

ところかしこでその名前が言われている。

いろんな人の話が聞こえてくるたびに、キリキリと胸が痛くなる。

一体私はどうなってしまったのだろうか。

こんな痛みはしらなかった。

ドロドロとした、気持ち悪い欲が溢れてくる。

自分が自分でなくなってしまうようで怖かった。

私も、レンゲルド様にお会いしたい

彼の声を初めて聞いてから一週間。

女の人たちは、みんなレンゲルド様にお会いできているが、私は後宮の中を歩き回ったり、庭にでたりしても一度もお会いすることがなかった。

どうやってお会いしているのだろうか。

とりあえず行動しようと思いつてはいたものの、なかなか事はうまくいかないものだと落胆する日々。

身分の低い貴族のつながりは欲しくなく、まだ私は女の人たちとあまりしゃべったことがないため、レンゲルド様の情報も分からずどうしようかと考えながら、今日も散策を続けていた。

一時間ほど、のんびり歩いていたとき一緒に散歩に付き合ってくれたアンナがふと、立ち止まった。

「なにか、叫び声のようなものが聞こえてきませんか？」

え？と思って立ち止まり、耳を済ます

「……やめて!」

聞こえた!

と同時に走り出す。

ドレスはこんなとき本当に邪魔だ。

幸いにも愛剣はアンナが袋に入れて持ってくれていた。

うん、今日目立たない場所ですぶりをしようと思ってもってきいてよかった。

少し走ると、そこには一人の女の子が男二人に囲まれていた。

男たちは腰に剣をぶら下げていて、女の子の手を引いている。

「あら?あの人たちは……」

とアンナのつぶやく声が後ろから聞こえたが、意識は既に前方へとむいていた。

気づかれる前にかたをつけようと、さらに加速し、愛剣の袋と鞘をそこらへんに投げる。

一人の男がこちらをみて驚いた顔をするも、もう遅い。

すかさず剣の柄の部分で殴り倒し、もう一人の、女の子の手を引く男の首先に剣先を突きつけた。

「女の子に、少し乱暴なのではないか？」

無表情が相まって、剣で迫る私の顔はそれはそれは怖いらしいとうちの団員がいていたが、この男も顔がすっかり青くなっている。

さて、女の子のほうは……とみると

キラキラと目を輝かせていた。

え？

「お、お姉さまかっこいいー！！！！！！」

「姫様！なにか誤解を受けられているようなので説明をおねがいますよ！」

剣先を突きつけている男がなにやら女の子に懇願している。

あれ？君、無理やり連れていかれそうになっただんじゃ・・・

「お姉さますっごいかっこよかったですんだけど、この人たちは私のこえいたちなの。べんきょう部屋につれていかれそうになって、ていこうしてたの。」

あっけらかんという女の子に目が点になり、慌てて剣を離す。

もう一人のほうをみると、完全にのびていた。

これは・・・やばいんじゃないだろうか

「あらやはり王都騎士団の方たちですわね。」

とアンナまでのほほんと言うもんだから、なんだか肩の力が抜けてしまう。

「も、申し訳ない。叫び声が聞こえたもので。」

というと、男は苦笑気味に

「いや、誤解を受けても仕方なかったでしょうし。それより、見事な剣さばきでした。」

といわれたため、思わず戸惑ってしまう。

ドレスを着た女性が、後宮近くからきたということ、側室候補だということとはバレバレだろう。

なのにその候補が剣を振り回し、到底貴族の女のことではないような勇ましい様子を見られては、ますます側室候補などふさわしくないと思われ、この王宮から出されるのではないだろうか。

顔が青くなつていく（無表情なので男は気づいていない）が、男は怒っている様子もないし、見事だと褒めてくれた。これは素直にありがとうと言つべきだろうか。

「もしよかつたら、騎士団の訓練所をみにきませんか？」

これは突然のお誘いだった。

「剣を持っていたということは、どこかで訓練でもするつもりだったのでしょうか？」

う、鋭い。しかし、貴族の女が訓練所にはいるなど、騎士達の邪魔になるのではないか？

そう思いきいてみると

「では騎士の見習いの服を貸しますよ。僕と一緒にくれば、僕付きの見習いと思われるでしょうし。なにより、あなたの剣さばきをみてから、僕も含めて、うずうずしそうな男たちが沢山おりますので、ぜひ見に来てください。」

どうやら、見習いを付けることができるほどの位を持つ男のようだ。そこまで言ってくれるのならばそのお誘い、乗るとするか。

「では、ぜひ。」

この訓練所での訪問が、のちに事態を急速にはやめていく結果となったのだが、今はまだ知るよしもない。

第六話 やはり鍛錬はいいな（前書き）

たくさんの人にみていただき、お気に入りも400件をこすほどしていただき、大変感激してます。ありがとうございます。

第六話 やはり鍛錬はいいな

騎士見習いの服に着替えるとさっそく訓練所の中に入る。

目の前を歩くのはシーリー・ギルフィルトとって、私を訓練所に誘ってくれた男だ。

なんせ自分の国の訓練所には毎日入り浸っていた私だが、他国の訓練所を見るのは初めてだ。

自国にはない訓練方法や訓練に使用するモノを見ては思わず興奮してしまう。

無表情なりにも頬がほんのり赤くなるのを感じる。

やがて人がたくさんいる広々とした広場にでると、木刀同士でぶつかり合う音、体術のみで互いを倒そうとする男たちなどが汗を垂らして行なっていた。

「やあシーリー、ずいぶん美しい騎士見習いだね。その子剣をしっかりと持てるのか？」

声がかけられた方をみると、体が人一倍大きい、茶色の髪を短く刈り込んだ男がたっていた。

こちらを見ながらふんつと笑った彼は、どうやら私が脆弱であると見た目で決めつけているらしい。

なんと久方ぶりの嫌味だろうか。

私が姫であることをかくして下町に行き、強盗など悪事を働くものたちを騎士団よろしく懲らしめようとした際に、よく言われたものだった。

そしてそんな輩には実力を見せることが一番効果的な手段だった。

思わずシィーリーを見つめると、

「彼も私とおなじく、ゾクゾクするタチですので、ほどほどにしないとストーカーのように追いかけて回されますよ。」

とニツコリ顔でいっているので少し引いた。

だからなんだゾクゾクするとは。

「ここはあんたがくるようなとこじゃねえよ。見学気分なら帰んな。」

とニヤニヤ顔でいわれては、こちらも引くにひけない。

私はつまり喧嘩を売られたのだ。喧嘩は売られたら買うものだと叔父から教えられた。

そしてタイミングを見定めることが大切だとも言われた。

うむ、お前が売った喧嘩、受けてたとう。

「こんな女に負けては貴様も恥ずかしいだろう。お前がいうならば見学で勘弁しとくぞ。」

まず、売り言葉には買い言葉で応答すべきであること。

そして相手が怒ったら素早く体勢を整え、迎撃準備にうつること。

逆上してすぐに切りかかってくる不屈きものもいるからな。

しかし、この男はそこまで礼儀がひどくはないらしい。

男は目をギラギラとさせて、木刀を握り締めながら

「はっ！口だけは達者なんだろうが、俺は手加減はするつもりはねえぞ。動けなくなってもしらないからな。」

と、応戦する意思を示した。

「こちらこそよろしく頼む。手加減したせいで負けたとほざくものもいるのでな。」

空気がピリピリとする中でシーリーだけはにっこり笑っていた。

この男、性格が叔父と似ている気がする。

たくさんの騎士たちが集まり、興味深そうに私と、喧嘩を売ってきた男を見ている。

「ゲインは第二師団の副師長だぞ？ちよっとやばいんじゃないか。」

「あの嬢ちゃん、ただじゃすまねえんじゃねえか。」

などと周りの騎士達はなにか言っていたようだが、前を見すえてゲインとやらに意識を集中させる。

はじめ！

その声とともに、少々殺気を含ませる。体を瞬発的に前へおしだし、ゲインの懐へといくのにかかる時間は1秒弱といったところか、だいぶ体がなまっているようだ。

愛剣ではなく木刀なので、まだ馴染んだ感覚はしないものの訓練用に使われる木刀なためか、随分と扱いやすい。

そのまま喉元に木刀を向けようとしたが、さすが副師長なだけはあ

る。

即座に自分の木刀で防いだようだ。

カァン！と木刀特有の衝撃音が広場に響くも、このとき既に私は半

回転に体をひねり、回し蹴りの体制にうつっていた。

ゲインはどうかやら、木刀でとめるので精一杯だったらしく、ガードがまったくされていない。

その結果、回し蹴りは見事ゲインの頭にクリーンヒット。

そのままドン！！という重低音とともにゲインは地に伏した。

もちろん木刀を喉元におくことも忘れない。

一瞬の隙が命取りになってしまうからな。

しかしこの男、なかなか見込みがある。

そんなことを思いつつ、周りをみわたすと、あたりは静まり返っていた。

なぜこんなにも静かなのだろうか。

騎士達を見ると、みんなそれぞれ目を大きく開かせて、口がわなわなと動いていた。

多少はなにかしゃべってくれ。なにかいたたまれないぞ。

」
「どつした？」

騎士達を見回しながら、私がそう問いかけた途端、一瞬のうちにわ
つと声があがり、その声の大きさに驚いて私は思わず体をびくつと
震わせたのだった。

第七話 王はいずこ？（前書き）

もうすぐシルヴィ編は最終回です。

はやくレンゲルド編で隠してる部分を書きたいです。

お気に入り件数が600件を突破・・・だ・・・と？

みなさまにハグしてまわりたいです。

ありがとうございます。

第七話 王はいずじ？

それからのことは本当に大変だったといわざるをえない。

暑苦しい男たちが雄叫びをあげながら、次は俺だの押すな俺からだのもみくちやになる様子はまさに混沌と言えよう。

ゲインは、一時呆然と寝つ転がったまま、空を見つめていたが、いきなり飛び起きると、私の手を取り、片膝をついた。

あーあ・・・とシィーリーの声。

なんだか嫌な予感しかしないんだが・・・と思っていると

「あんたの蹴りに惚れた。一生付いていく、いや一生お共にしてくれ。」

とキラキラとどこの子供だというほど目を輝かせていうものだからこっちは全力で引いてしまった。

なんだ一生とは。どうしてひと足どころか何足もとんで一生お供するなんて決断がでるのか。

お前の一生をこんなあっさりきめていいのかゲイン。

そして周りの奴らもいいぞーや、一生下僕発言でたぞーなどと騒が

ないでいただきたい。

とりあえず返事は考えとくという名の拒否で、いったん騒ぎを落ち着かせ、あらためてほかの騎士たちと対決をすることになり、とても充実した時間を過ごすことができた。

さすがにここまで騒ぎが大きくなっては、側室候補の女だとばれるのも時間の問題と思うので、訓練所の参加は今日限りにした。

ほかの騎士達には、シーリーに適当にごまかしてもらおう。

まあ騎士見習いの服をきて、髪を後ろで結んでいたため、側室候補だとはすぐにバレないだろうが。

レンゲルド様にはけっきょく会えなかったが、側室候補の滞在期間は一ヶ月もある。

のこり三週間もあるならば、簡単にみつけることもできようと思っていた。

が、どうやら考えは甘かったらしい。

こちらにきてあっという間に三週間もたってしまった。のこり一週間をきつたというのに、私はまったくレンゲルド様に会えずにいた。ほかの側室候補はみんなレンゲルド様にお会いしているようで、なぜ私だけがお会いできていないのだろうと、少なからず落ち込んだ。毎日、レンゲルド様を探す散策の旅をつづけていたのだが、騎士達に遭遇するとめんどくさいことになるため、散策範囲が大幅に軽減してしまったのもひとつの原因だと思う。

「夜会の衣装はもう決まりました?」

「ええ、光沢のでた最高級品のものをわざわざ国からもってこさせましたのよ。」

「それより、その夜会には、かのシュバルティ帝国のルドヴィーリ様がお目見えになるとか。」

「まあ!!それではますます夜会に向けて気合をいれねばなりません

んわね。」

と、会話から察するとおり、最近の側室候補の方々はすっかり夜会の準備に忙しいようだ。

もうすぐ側室候補たちは、レンゲルド様にお目付された人以外は自分の国に帰ることとなる。

そのために、大規模な夜会が国に帰る二日前にされることになった。その夜会でどうやらこのヴィングリー国に残ることのできる姫たちの発表を行うらしい。

私はこの三週間一度もレンゲルド様にお会いしてすらいないので、完全に除外であろう。

しかし、夜会でやっとレンゲルド様にお会いすることができる。

喜んでいいのやら悲しんでいいのやら。

もう一度会えたら、この気持ちはどんなふうに変化するのだろうか。

このとき私は、アンナが準備してくれているドレスをぼんやりと思出しながら、夜会ではいかに目立たず、レンゲルド様をみる（というより観察する）ことが出来るかを熱心に考えていたのであった。

念のためにいっておく。

私はけっしてストーカーではないぞ。

第八話 夜会の衝撃（前書き）

あばばお気に入り件数が900件を超えた記念に思わずハーゲン
ダッツを買ってしまった。やばいリッチ！

本当にありがとうございます。

第八話 夜会の衝撃

夜会当日の夕方、後宮は荒れに荒れていた。

少しでも王の側室になる可能性のあるものはみな、ほかの女よりも目立つもの、高級なものと殺気をとばす勢いでアクセサリーやドレスに力を入れていた。

逆に気合をいれすぎているものもあつたが、みなさすがは大国の姫というべきか、後宮内を夜会用のドレスをきて闊歩する様子は大変華がある。

赤、群青色、黄色に桃色と目がチカチカしそうななかで、私のドレスは若草色で印象が薄くなるようにつくられていた。

自分としては、目立たずに王をみることができればいいため、ベストなドレスなのだが、ほかの姫君たちは気に入らなかつたらしい。

「あなたをみた最初から思っていたけれど、貧乏貴族は貧乏貴族なりに、もう少しドレスの修正でもしていらしたらどう？あなたの衣装で側室候補みんな地味だなんて思われては恥になりますわ。」

「あなた一人いるせいで、一気にまわりの景色の華やかさが損なわれてしまいますわ。どうせ、側室として名前を呼ばれることはないでしょうし、さっさとかえられたらいいかしら。」

この二人は、最初にこそこそと嫌みをいつてきた二人でもある。

キール国のアシュレイ・サウンダリットとベゾラン国のサリー・

リンストン。

アシュレイは赤茶色の長い髪をウェーブさせており、少しキツめな顔の美人で、サリーはすこしくすんだ金色の髪をお団子のように頭の上におさめている可愛い系だ。

どうやらこの二人に目をつけられているらしい。

アシュレイはふん！と鼻で笑うと、さっそうと華やかな方へと歩いていく。

サリーはニコニコと笑いながら

「はやく帰り支度をしてきたら？」

と毒をはいて、アシュレイのあとを追っていった。

正直、下級貴族はここまで差別をうけていたのか、と驚く。

なぜ人々は階級で人のランクを決めつけてしまうのだろうか。

そしてなぜ簡単に人を見下すことができるのか、私にはまだわかりかねていた。

上に立つものとして情けない限りだ。

なにはともあれ、夜会は開かれる。

壮大なる音楽と共に人々は優雅に踊る。

しかし私はそれとなく混雑する場所をさけ、見事壁の花になることに成功。

笑顔でこの国の大臣たちと踊る側室候補たち。

しかし、それが作り物の笑顔であり、最後のチャンスまでのがさなという捕食者のように、目が輝いていたのを私はしっかり確認した。

側室候補の人たちは全員大広間の中にいるし、すでに大臣たちもそろって各自飲み食いなどしているようだった。

だが、肝心の主役であるレンゲルド様はまだこられていないようだった。

いつも一緒にいる宰相様もいない。ちなみに、八年前レンゲルド様のお付きをしていたのは彼だったらしい。

その二人がいないことは、さすがに変だ。

夜会はまだじまっているのに……。

そういえば、今日だれか呼ばれていると、数日前にほかの側室候補が話していたのだが、だれだったろうか。

その人物のせいで遅れているのか？

と不安になった途端に、大きな音と共に開かれるドア。

あまりの勢いに貴族や側室候補たちは動きを止めて、大きく開かれたドアをみる。

そこにいたのは、息をみだらせ、息苦しそつに呼吸を繰り返すレンゲルド様の姿があった。

思わず胸がきゅっと縮まる。

ああ、ますます胸が高鳴っていく。

初めて見た時よりも、八年ぶりに彼を見たときよりも、さらに大きく、苦しみをともなうて。

これは、恋なのだろうか？

いや、もう恋という名ではおさまらない。

もう、彼を考えるだけじゃ満足できないのだと、今潔く認める。

彼を見つめるだけではもうダメなのだ。

もっと。もっと・・・と思考は、今現在彼を見つめることで貪欲にレインゲルド様を求めていく・・・。

しかし、一方のレンゲルド様は夜会を楽しむ様子もなく、慌ただしく側室候補の顔を見て回っている。

ここまで必死な様子は大臣たちも初めてだったのであろう、口をあんぐりとあげながら目を見開いて、レンゲルド様の意味不明な行動を見つめている。

しかし、私は、彼の必死な様子を直視できなくなってしまうた。

彼は誰かをさがしている。

ずくつと、胸が張り裂けそうに痛くなる。

そう、彼にはもともと想い続けている人がいるとの噂があった。

だからこそ、私は彼に会うだけで十分だった。

……十分なはずだった。

どうやら、彼の最愛の人は、側室候補の中にいたのだろう。

でなければ、普段冷静沈着、冷えきった王として名高い彼が汗を流しながら人をさがすだなんてありえない。

自分の恋心の深さを気づいた瞬間に失恋とはなんとまあ滑稽なことだろうか。

彼をみるだけで満足できるなどと、よく叔父にいったものだ。

今の彼の姿をみるだけで、顔もわからない彼の最愛の人にほの暗い気持ちを感じてしまうのに。

もう、そんな彼を見続けるのは、あまりにきつかった。

大広間にいるすべての人たちが彼をみる中、私一人だけそつと背中をむけ、大広間をぬける廊下へと歩いていく。

誰もそんな私を気にもとめない。

そう、これでいい。

今までどおりの生活にもどるだけだと私は私を説得する。

「あ、ごめんなさい。」

前をよくみてなかったおかげで、人だかりにぶつかり、体が大幅によろめく。

視界に彼が見えそうになるのを、ぐっとおさえて、ゆっくりと歩きだした。

が、その瞬間激しいほどの力で後ろから掻き抱くように抱きしめられる。

余りにも突然の抱擁にびくりと固まる体。

はあという艶やかな安堵のため息が自分の耳のすぐそばをくすぐる。

なにが・・・起こったのだろうか？

状況の把握もできないなか、今度は体を横抱き、つまりお姫様だったことをするようにもちあげられ、足が宙にうつく。

悲鳴がでそうになるのをおさえて、こんなことをする不届きものはだれだと、顔を確認した瞬間、思わずピシリと体が固まった。

「ルドヴィリー王弟殿下、これで約束を果たしていただけますね！
！！！！」

これは夢だろうか。

きらきらと光が舞う。

目の前にあるのは、幼き日にみた、キラキラの笑顔。

眩しくもあり、ずっと欲しかった笑顔が、いま目の前にある。

そう、私を抱き上げ、ルドヴィーリー王弟殿下……私の叔父に何かを宣言しているのは、私の初恋の相手であるレンゲルド様だった。

混乱する頭の中で、叔父のニコニコとした笑顔が妙に印象的だった。

第八話 夜会の衝撃（後書き）

次からはレンゲルド編です。

第九話 レンゲルドの恋（前書き）

おおおおお気に入りに1500件突破ありがとうございます！！

レンゲルド様の恋を応援してやってくださいませ。

第九話 レンゲルドの恋

一目惚れだった。

引力のごとく引き寄せられた。

これは運命だと、当然のように思えるほど、彼女に惹かれた。

そうして13歳となった俺は、初めての恋におちたのだった。

シュバルティ帝国。

この国は、俺の国も含めてこの大陸の頂点に立つ国だ。

戦で頂点にたつたわけでも、貿易で頂点になつたわけでもなく、ただ神に愛されている国として私たちは敬い、尊敬している。

いつから建国したのか、シュバルティ帝国の歴史書にしかのってな

いほどの国よりも長い建国年数は、この大地を神が作りあげた時期に、神による祝福によってヒトが生まれ、そのヒトたちが建国した最初の国なのだという伝説の意味づけをしている。

そんなシュバルティ帝国の創立記念祭が行われるとあっては、各国の王族たちが総出で参加するのも当たり前だと言わざるをえない。

そんな中、シュバルティ帝国の創立記念祭に参加していた俺は、不機嫌が最高潮にたっしていた。

創立祭がめんどくさかったからというのもあるが、俺の弟……もうすぐ三歳になる……が迷子になったらしいのだ。

自分の後ろにいるだろうと、歩く速度には気を付けつつ、時々は後ろもみていたのだが、一瞬気を抜いたすきに居なくなってしまうたのだった。

一応、弟に付いている護衛も一緒にいるので、誘拐などの心配はないが、護衛は弟の後ろに付いていくばかりでなく、しっかりと弟が俺についてくるようアシストしろよ！とイライラをつのらせていた。

「おいロンフィル！俺はヴィンを迎えに行く！もう我慢ならんぞ！」

「あなたがいくとさらにややこしくなりそうなので、素直に待つていてください。」

俺の付き人であるロンフィルに抗議するも、ニコニコとした顔で頭

を横にふりながら毒をはく。

こいつ・・・昔から俺のお世話をしてるからってもう少し言い方ってもんがあるだろう・・・。

しかし、そういう人間が周りにいることが大切だということもよくわかるぶん、なんともいえない気持ちになるのだ。

だいたいヴィンが探検したいなどというから・・・いやそもそもこの創立祭にくる人間の数が異常なんだ。

こんな騒々しいなかでやはりヴィンに歩かせるんじゃなかった。しかだつこするというと、自分で歩くといつてきかないし・・・。

もんもんと考え事をしていたところ、

「レンゲルド様。ヴィンリント様がこられましたよ。」

というロンフィルの言葉が聞こえてくる。

思わずぱつと前をむくと、トコトコとい音が聞こえてきそうなほどたどたどしく歩くヴィンの姿が目に入った。

思わず走り出すと、ヴィンもこちらに気づいたようで、満面の笑みを浮かべている。

お前！どんだけ俺が心配したかも知らないで！と思うも、頬が緩む

のが抑えられない。

結局は可愛いと思ってしまい許してしまうのだから、弟というものは夕チが悪い。

一気に駆け寄ってその勢いのままだっこする。

きゃっきゃと笑う弟に、思わず笑みが溢れる。

さて、そろそろ親のもとへ戻らなければ・・・と軽く周りを見渡したとき俺は衝撃を受けた。

俺の視線の先には、シュバルティ帝国の王族、または王族に招待されている貴族たちが一様に座っていたのだが、その中でも中心の方に座っている少女にどうしようもなく惹かれた。

髪はシュバルティ帝国独特の透明といえるほどキラキラと光る淡い水色の髪で、年は俺と同じか、年下ぐらいで、全体的にほっそりとした儂げな印象を受ける。

けれど何よりも俺が惹かれたのは、その子の表情だった。

ほんのりと赤く染まる頬と、すこしうつむいて、両頬に手を置いて赤らむ頬を抑えようとしている仕草がなによりもぐっときた。

顔の表情が無表情に近いのに、ほんのりと赤く染まる頬と、目が少し潤んでいる姿は本当にたまらない。

その目を俺に向けて欲しい。

俺を見てくれ。

そう思っている自分になんの疑問も浮かばなかった。

運命だと、がらにもなく思えた。

あの少女は、俺の最愛なのだ。

一目惚れだった。

そして、俺は彼女を手に入れるためならばなんだってしてやると決意した。

第十話 レンゲルドの焦躁（前書き）

大変！たいっへんおまたせいたしましたああ！！！！

本当に本当にごめんなさい。

遅くなって本当にすみません。

テスト終わった！夏休みに突入！というわけでちまちまと更新していきたいとおもいます。

感想をくださったかたも、返信が遅くなってしまいもうしわけありませんでした。

第十話 レンゲルドの焦躁

「にーたま？」

はっと気がつくのと、目の前には俺の付き人のロンフィルとヴィン。

きよとんとしたヴィンを思わず見つめる。

俺は一体どのぐらいほづけていたのだろうか。

ロンフィルは今まで誰かと話していたようで、その相手はもう背中を向けていたが、ロンフィルはおじぎをしたまま止まっている。

相手はどうやら随分と身分の高い者のようだ。

あの光り輝く髪はシュバルティ帝国の王族の血筋の誰かだと、推測できる。

ああ、あの少女も、とても綺麗な髪をしていた。

腰まで伸びる髪は、思わず手を伸ばしたくなるほどだ。

また、あの少女を見てしまったら、今度は本当に囚われてしまうのではないかと思うと、ふるり・・・と体が歓喜する。

なんとということだろうか、一国の皇太子が、少女に囚われることを望むなど！

しかし、衝動は抑えることなどできない。

「ロンフィル。あそこに座っている少女はどここの貴族かわかるか？
髪が王族特有のものだから、身分もそれなりに高いと思うが……。」

そんな俺の言葉に目を見張るロンフィル。

そのあと、ため息をはき「あの人もひどい人だ。」とつぶやくと

「いまや皆席を自由に歩いているようなので王族との区別も難しい
ですね。」

といった。

「……そうか。」

いや、分かってはいたが、どうすればいいものか。

名前だけでもしることができたら、国に帰ってすぐに許嫁の申請を
取りたいのだが……。

「少し、二この国に住んでいる奴に聞きにいつてくる。」

「ちょ……ごほん。レンゲルド様、私が行きますので、あなたが
たは、早く王と王妃のもとへ戻られてください。そろそろ心配さ
れるでしょうから。」

この場所を離れるのは本当に嫌だった。

まるで引き裂かれるようだ。

せめて話しかけに行きたかったが、すでに一度、家族全員で挨拶に
いつている。

大陸全土からくる大人数をうまく裁くためには、一回限りの挨拶が
決まられているのだ。

あの壇上にあがるのがもう少し遅ければ・・・と悔やむが、もうす
ぎたことだから仕方がない。

何度も何度も彼女の姿を振り返りながら、後ろ髪が惹かれるどころ
かぐいぐい引っ張られるぐらいに感じながら、俺はしぶしぶ家族の
もとへと帰っていった。

このときロンフィルは誰としゃべっていたのか、そしてなぜ、ロン
フィルは俺が彼女のことを聞きにいくと言ったとき焦っていたのか
もっとしっかり考えておけば、長い年月を切なく過ごすこともな
かっただろうにと今なら思う。

しかし、その措置が正しかったのだということもわかるから、なん
ともいたたまれないのだ。

「なぜだ！なぜわからない！」

俺はこのとき怒り狂っていた。

なぜならば

「水色の髪！創立祭の時に王族と貴族の席に座っていた少女！それだけあれば情報などいくらでもとれるであろう！なのになぜ名前すらわからないのだ！」

そう、彼女の情報がまったくといってないのだ。

いや、ただでさえシュバルティ帝国は鉄壁といういわれを持つほどの強固な警備と、古代の魔術師とかいう奴の結界で守られている。

いいかえれば、外からシュバルティ帝国を無理やり調べるなど無理があるのだ。

すべての情報源はシュバルティ帝国の住民、または滞在をゆるされた旅人などのひとにぎりのみ。

そして彼らはシュバルティ帝国にとって悪い影響になると思われる情報をけっして売りはしない。

どこの国よりも建国が長く、どの国よりも忠義心の厚い国民をもつ国。そのような奇跡のような国がシュバルティ帝国なのであり数あまたの人間たちが崇拜する国なのだ。

しかもこの大陸において、シュバルティ帝国に恩義のない国などない。

建国するのを影から支えてもらったり、あまりにも非情な戦略にまきこまれそうになったときに助けてもらったり、世界大戦になりそうなほど戦争が大きく膨らんだ時にそれぞれの国の仲介をし、ことを丸く収めたのもシュバルティ帝国だ。

つまり、表立ってシュバルティ帝国に敵対するような馬鹿な国はないのだ。裏ではわからないが。

そして少女のことがわからないということは、情報をくれる人間たちは、その少女の情報が回ることにシュバルティ帝国に悪い影響をあたえるという判断をしたということだ。

「一体だれなんだ。彼女は……。」

彼女のことを誰よりも知りたいというのに。

自分が一番彼女のことを知りたい、そして彼女を誰の目にも触れない場所へ隠してしまいたい。

激しい焦燥とほの暗かな気持ち俺の胸をつつむ。

こうしている間にも、彼女がだれかと結婚の約束でもしてしまったらと思うと気が狂いそうだ。

彼女が俺以外の男の妻となる前に、彼女との未来をどんな形でもいい、約束できるものが欲しい。

だれか。

お願いだから。

彼女とつながる橋をくれ。

第十一話 レンゲルドの無知

あの創立祭から一年が経った。

俺は14歳になり、体つきがどんどん変わっていくのが自分でもわかった。

そして、俺にくる縁談の話も、多くなってきた。

けれど、その現実的なものを遠ざけるように俺はひたすら彼女のこ
とを考えた。

彼女は、俺と同じように成長して少女ではなくなる。

いずれ、少女から大人の女へと変わっていく。

それが本当に怖かった。

彼女も、俺と同じように縁談がきているのだろうか？

焦りはとどまることをしらず、日に日に心を真っ黒に染め上げてい
く。

だというのに俺をあざ笑うかのように、少女の情報はなにひとつで
てくることはなかった。

王になるために必要な勉強も、体を鍛えることも心あらずのまま、
この国の王になるという意味を考えることも漠然としたまま、一日
一日はすぎていった。

そんな、焦るばかりの日々が続いたとき、俺にとって素晴らしい朗報が入ってきた。

なんと、あのシュバルティ帝国の王弟殿下であるルドヴィーリー殿下が、この国に視察にきているらしい。

いつも秘密裏に調査しては、調査しおわってからとぼけた顔して国に挨拶と評して国の現状を伝えるという殿下のうわさに思わず浮き足立つ。

俺の国、ヴィングリー国は大変恵まれた地域だ。

海と山のどちらもが国の領土内にあり、自然による厄災もほとんどない。

雨も定期的なふり、暑すぎることもなく寒すぎることもない快適な温度に、森に行けば豊富に取れる果実。

しかし、このあまりにも資源が豊富なことが、かえって国を危機へ

とおいやっている。

この国をはさむようにしてたつ二つの国、キール国とベゾラン国とは長い間緊迫状態が保たれていた。

50年に一回ほど大きな戦いがあったては引き分けるようにして条例を結ぶ。

そしてどちらがその条例を裏切るのか、常に緊迫した状態で監視をし合うのだ。

本当ならば、資源の豊富さによる海と山からの貿易が素晴らしいと言われるはずが、それよりもまず、隣国との戦いに対するための軍隊の強さが目に入るようになってしまった。

そんな危険と隣合せの国だからか、よくシュバルティ帝国から視察がくる。

そして今回はなんとといっても王弟殿下だ。無礼にあたることがないようにしつつも、自分の気持ちを伝えなければ。

そしてただの口約束だけでも、しないよりは何倍もいい。

ヴイングリー国の王子が、シュバルティ帝国の少女と結婚をしたがつているとの認識さえあれば、なにかしらの情報ももらえるはずだし、シュバルティ帝国からもなにか返事はいただけるはず。

この時の俺は本当に甘かった。

自分の感情を抑えることもできず、それが周りにあたえる影響を考えることもできない、ただのガキだったんだ。

そしてそんな俺に王弟殿下が少女の情報なんてくれるはずがなかった。

「その話、お断りいたします。」

シュバルティ帝国の城にルドヴィリー王弟殿下がきて、客室にいるのだという話を聞いてから俺は部屋を飛び出し、王弟殿下に会いに行った。

そして自分の気持ちをつたえた・・・のだが、俺ははじめ、なにをいわれているのかわからなかった。

自分では、丁寧に、相手の気分をそぐわせないようにと気を遣いながら話したつもりだった。

俺が創立祭からずっと、見かけた少女を忘れられないこと。

その少女のことが知りたいが、なにもわからないので、なにか知らないかということ。

そしてその少女と婚約を結びたいということ。

それがどれだけ無神経なことをいつているのか、俺は全く分かっていなかった。

「君はなぜ？という顔をしていますね。」

お茶を飲みながらにこにここと笑う王弟殿下に呆然と顔をむけるしかない俺。

「君は無知だ。その無知なところ、僕はすごくいいと思う。まだ何色にも染まっていないということでもあるからね。」

ただ時として無知は何事にも耐え難い悲劇を生むこともある。

君はシュバルティ帝国の貴族の誰かが、違う国と婚約を結ぶことによる混乱を考えたことはあるかい？」

ただただ、俺はその言葉を何度も何度も頭の中で繰り返しながら、ルドヴィリー王弟殿下をみつめる。

彼ははあ、と大きなため息を一つついたかとおもつと、

「その意味を理解したと思う頃に、またこの国を訪れるよ。僕はただの馬鹿な男にあの子を嫁がせる気はないからね。

自分がなにをしたいか、なにをすればならないか、自分で考えなくては王になるのもおこがましい。」

ぐざりと、胸に楔が打ち込まれたようだった。

彼は彼女を知っている。

俺が何度も何度も望んだ、彼女との橋が、今日の前にかかっている。

そして彼女とつながりを持つものに今俺は失望しかけられているのだ。

かのシュバルティ帝国の王弟に、王になるのもおこがましいと言われるほど自分は無知なのだ。

どうやって彼の部屋からでてきたのかすら、覚えていなかった。

ふらふらと、自分の部屋にはいり、彼からの言葉を思い出し、自分が彼に言った言葉を思い出して、恥ずかしすぎて死ぬかと思った。

けっして小さくない、軍事国といわれている国の皇太子が、のちに国民を背負い守らなければならぬ未来の王が、王になるのもおこがましいといわれたのだ。

恥ずかしくて、悔しくて涙が止まらなかった。

執事やメイドたちにきこえないよう、ロンフィルに聞かれないよう、ベットに顔を押し付けて、声を押し殺して、それでも涙は止まることなく、彼女へ溜まっていた黒い気持ちが出てきたかのように長い間流れ続けた。

自分は今まで何をやっていたのだろうか。

彼女とつながることはかり考え、想像ばかりして、なんとという無駄な時間だったのだろうか。

その想像には未来がないのだ。つながったその先はなにも考えていないという愚かさ。

この無駄な一年があれば、彼女を受け入れ守るための人脈をつくることができただろう。

一年あれば、今以上に彼女を守るための体を鍛えることができただろう。

シュバルティ国の人間、特に水色の髪を持つ者と婚姻を結ぶということは、そういうことなのだ。

シュバルティ帝国という鉄壁から単身で彼女はでてくるのだ。

シュバルティ帝国に狂信的な思考をもつものたちは、そのような獲物を逃すはずがない。

彼女を必ずや連れ出し、自分の国で一生過ごしてもらおうとまさに脅威的に迫ってくるだろう。

完璧に婚姻を結んだあとは、さすがにそういう輩も減るだろうが、婚姻が成立するまでの間、彼女は「ほかの国に嫁がれるぐらいなら」という理由で襲ってくるものたちから身を守らなければならない。

それほどまでに、かの国に傾倒する国、集団、民族が大勢いる。

自分がなにをしたいか・・・なにをすべきか。

自分がしたいことは、一年前からかわってはいない。

ただ、そのあとのなにをすべきかは、これからやっていかなければならない。

彼女を守るための地位を・・・力を、そしてこの国に嫁いでもらう

ためのメリットを、俺はーからつくらなければならぬのだ。

第十二話 レンゲルドの疾走（前書き）

たいっへん遅くなりましたすみません。

少しずつでも更新しなければと思い、申し訳ないほど遅くなりましたがレンゲルド編更新いたしました。

とりあえず、レンゲルド編の下書きは終わっているので、手直ししつつ、更新していききたいと思います。

第十二話 レンゲルドの疾走

やらなければならないことはそれこそ星の数ほどあった。

まず、人脈をつくるために他の国への短期留学をすることを父にお願いした。

自国での人脈も当然つくらなくてはならないが、俺にはロンフィルと弟のヴィンがいる。

彼らは自分にとって唯一無二の存在であるし、彼らつながりで人脈をつくることができるため、ひとまず自国のことは彼らにまかせるとして、俺は他国にいき、様々な技術、学力、武力、帝王学などを学べるだけ学ぶことに専念した。

月日は光のようにはやく流れる。

俺は文字通り死にものぐるいでさまざまなことを学び、吸収していつ

た。

そしてそれと比例するかのようになり、俺は冷静沈着で冷えきった男という印象を人々に植え付けていった。

赤の他人とくだらない会話をする暇があるなら、ひとつでも多く国の成り立つ方法を学んだし、体を鍛えることに集中した。

自分を追い込めば追い込む程に、表情は固まったかのように無表情になっていった。

影で仮面をかぶったようだと恐れられても一向に構わなかった。

幸い、弟は自分に似ず、誰からも好かれるような性格だったし、表情もコロコロとかわり大変變くるしいと様々な人間から好意をもたれている。

将来、この国の外交は弟に任せられると思えるほどに、弟は人との接し方をよく心得ていたし、頭の切れもいいことから周囲からの信頼も絶大であった。

普通ならば、ここまで自分より秀でた弟に対して嫉妬心などをもつのであろうが、俺に足りないものをもっている弟がいることを、俺は心の底から喜んだ。

自分に足りないものは、どうあがいたところで簡単に満たされるものではないし、あがくだけの時間など俺には惜しい時間であった。

その足りない部分を補ってくれる存在が身近にいるという奇跡。

これは、ヴィングリー国を将来安寧に治めるためには、必要不可欠な奇跡であった。

そのように割り切った考えができたのも、ひとえにヴィングリー国のメリットをひとつでも多く増やそうという考えで思考が埋まっていたからであるのだと考えると、自分の思考回路の単純さに少々苦笑いしてしまう。

そして、ある日、ついにその時はきた。

父が重い病気にかかり、倒れてしまったのだ。

ベットから起き上がることも困難になり、それを秘密裏に知った隣国の動きが比例するかのようになくなっていく。

状況はまさしく戦争の一手手前までできていた。

そして、俺は病に伏した父からの命を受け

この国の王となった。

いまから、約2年前のことである。

そして戴冠と同時に西隣りの国からの襲撃を受け、祝福の宴などもないままに俺は戦争を収めるためにひた走ることになった。

俺には確信があった。

この戦争をヴィングリー国に有利な状態で終戦させることができれば、他の国から、俺は王として一目おかれることになる。また長年引き分けて終わった隣国との関係を変えさせることが出来たならば、ヴィングリー国の評価も上がる。

なにより、戦争に勝つことでヴィングリー国の貿易は盛んになり、ますます大国としての地位が築かれていくだろう。

この戦争は俺にとって、予想外にも願いを叶えるための踏み台になった。

できるだけ早く、できるだけ被害を出さずに戦争を終わらせるために俺はひたすら戦いの最前線にいき、直接指揮をとり、勝利をもぎ取っていった。

勝ち星が増えるごとに、俺に対する評価が高まっていくのを実感していった。

自国の民や、戦争に赴いた兵士達からの期待と信頼、他国からの感

嘆と驚異がヴィングリー国をますます強く、大きくしていく。

そして、二年の攻防のうちにヴィングリー国は完全なる勝利をおさめたのであった。

これまで数百年と続いた隣国との対等な関係が、たった二年のうちにくずれさった。

これはまさに歴史的戦いとして、ヴィングリー国の歴史のなか到大的に刻まれることになり、総指揮をした若き王の戦いぶりも、長年にわたって熱く語り継がれることになるのだが、俺にはそのことを気にする余裕はなかった。

ヴィングリー国がこの戦争で勝利をおさめたからといって、他の国との位置関係がどうなるのか不明なために、手放して喜んでなどいられるはずもない。

これから、地道に他の国との関わりをつなげていくはずだったのだが、ここで、俺の計算は少し狂うこととなる。

第十三話 レンゲルドのため息

「后だと？」

その話は戦争が終わってあまり間がたつてないころに、大臣たちによってもたらされた。

「今は戦争の事後処理で忙しいことはお前たちも重々承知しているだろう。なぜわざわざ厄介事を増やさねばならない。」

ただでさえ冷酷、無表情といわれている俺の顔がますます固くなっ
ていくのを、冷や汗をかきながら大臣たちは見守っていた。

生唾をぐくりと飲み込み、大臣の一人が勇気をもって言葉を続ける。

「はい。それはもう承知しております。しかしながら、この戦争の勝利はこの国を揺るがすほどの出来事なのであり、それを成し遂げた王の祝福を、国の者たちは今か今かと待ち望んでいるのです。もちろん、私たちもですが、この国を平和にしてくださいと王に、今度は幸せになつていただきたいと国民みんなが考えているのです。」

俺にひたりと見つめられ続け、滝のように汗を流しながらも、その大臣は一步も引くことなく、俺を説得し続ける。

「・・・今、戦争に勝った国として我が国は周囲の国から注目を浴びている。この機会に、他の国とのつながりを強くする・・・か。」

俺の抑揚がない、淡々とした声で言われた内容に、大臣の顔は青を通り越して真っ白になっていく。

周囲の大臣たちもみな一概に顔をひきつらせていく。

俺がなにを思っているのかわからない分、怖いというのもあるのだろう。

そこまで恐怖を持っていてもなお提案してきた勇氣には評価したいな、と今話していることはまったく違ふことを頭の中で考える。

「ようは、俺を使って他の国を引き寄せるということだな。」

「そんな！王を使うなどと！」

王の言葉に思わずといったふうに一人の大臣が声を挙げる。

「王は、長年他の国とのつながりにこだわっておいででした。この機会にパイプをつくることはたやすく、今ならばどの国からも王妃や側室の縁談をいただけるでしょう。」

その言葉を聞いて、俺は一度、ふむ、と答える。

たしかに大臣の言葉には説得力がある。他の国とのつながりは俺個人としてもつきたい。

俺が思い続けている彼女の話を彼らにするつもりはないが、このまま縁談を破棄するとなると、たしかにこの国にとって進歩はないに等しい。

せつかくのつながりをこのまま捨てるのか？

しかし、縁談などがきていたとしても、俺は彼女以外を王妃にするつもりもないし、側室もいるだけ無駄だ。

なにより、つながりをつけてこの国のメリットを増やしたとしても、彼女を手に入れることができなければ意味がない。

そう、頭の中で考えたとき、自然と答えはでていた。

「やはり、縁談は見送る方向で考えておけ。いまは戦争の事後処理が先だ。」

彼女が俺の原動力であり、物事をするにあたっての比較対象なのである。

彼女に有益のあるもの、彼女を手に入れるために必要なものを一番に考える。それが今までの俺の行動の中心であり、今後変えることとはない、俺の信念である。

この信念は揺らぐことはない。そう、思っていたのだが……

少し、甘かったらしい。

大臣たちはあの日、一度はひいたが、その後毎日のように俺のもとに訪れ、しまいには父や母、今年11歳になる弟に宰相のロンフィルまで味方につけ、俺のため、国のためにと語り続けた。

それはいつの日からか、俺への愛がどれほど強いかに話がかわってゆき、尊敬しているからこそ、幸せになってほしいなどと泣きつかれる羽目になっていった。

王である俺に忠誠を誓ってくれている手前にぞんざいに扱うこともできず、日替わりで訪れる大臣たちに俺はとうとう妥協案をだし、この騒々しい日々をなんとか終わらせたのであった。

女たちが集まったホールを見渡して、思わずため息を吐きそうになるのをグツとこらえる。

俺は一体なにをやっているんだと、頭を抱えたくなってきた。

しかし、これは大臣たちとの攻防の末に妥協した案なのだ。

そして、各国の姫たちがいる中で、我が国の心象を悪いものにしてはいけないと、身を引き締めなおす。

軽く挨拶をすると、光り輝く女たちの目。

なぜこんなにもみな捕獲者のような顔をしているのだろうか。これではひっかかるはずの獲物も逃げてしまつてしまつてしまっている。

ああ、彼女に会いたい。

ただ一言が頭をよぎり、無意識のうちにため息がでていた。

その彼女がまさか、この中にいたなんてことは露知らずに。

第十四話 レンゲルドの見廻り

后候補を呼んではみたものの、俺自身がその者たちの前に現れることはほとんどなかった。

大臣には押し負けたが、本来ならばこのような催しに反対だった俺にしてみれば、なぜわざわざ貴重な時間を割いてやらねばならないということだ。

まだ、戦争が終わった直後でなければ、いちおう各国の主賓として王自らも少し丁重に扱っただろうが、戦争の事後処理に追われている今、そのような余裕はない。

今回の催しは后を見つけないというよりは、様々な国とのつながりを薄くでもいいからつけるといった意味合いが俺のなかでは強い。

それが、たとえ周囲の思惑とは違っていようと、俺にはまったくもって后など興味がわかなかった。

それは、偶然居合わせた后候補に擦り寄られたり、色仕掛けで迫られてもまったくもって変わらず、そのことを屈辱的と捉えた后候補たちが、王と密会をしたなどとホラ話をするので溜飲を下げるようになるのだが、それもまあ、俺にとってみれば好きにやってくれという気持ちである。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

この状態に対してやきもきしているのはなにも后候補のみではなかった。

周囲の大臣たちもまた、まったく女たちにかまおうともしない王に対して齒がゆい気持ちでいっぱいであった。

レンゲルドが急に、王になるための勉強を本気でしだしたのを見たときには思わずホツとしたのだが、それと同時にレンゲルドの女遊びはピタリと止んでしまった。

そこも本当ならばホツとするところであろう。どこの出かもわからない女を孕ませてしまうようなリスクがなくなったのだから。

しかし、それにも限度があるだろうと、大臣一同は思う。

レンゲルドがルドヴィーリー殿下にあった日、つまり14歳から今まで、レンゲルドはずっと女を抱いていないのである。

思春期真っ盛りな時期を、清廉潔白に過ごしたレンゲルドに対して大臣たちは逆に別の心配をしなければならなくなった。

レンゲルドにとっては、自分が后にしたいと願う彼女以外は欲情もしないし、抱こうとも思わなかったためになんら不思議ではないのだが、大臣たちにとってみれば、世継ぎ問題に発展する大問題。

この機会にぜひとも后を娶ってもらい、ゆくゆくは世継ぎを！と考えているのだが、そのような切実なる願いをレンゲルドはまったくもって察知していなかった。

- - - - -

誰か俺の気をひくような女はいないのか、と大臣が王宮で働く者たちにきいたのは、后候補がこの城に来てから一週間は経過した頃だった。

騎士や次女たちが様々な后候補の話を俺の前でするのだが、俺自身はまったく興味がなかったために書類処理を淡々と行なっているという有様。

そんなとき、王都騎士団の中でも上の位置に属するシーリーイーが俺を訪ねてきた。

相変わらずのきなくさい笑顔に、ルドヴィーリー殿下と同じ臭いを感じ

じると俺は密かに思ったのだが、顔は無表情のまま、受け答えをする。

「お前が来るとは思わなかった。」

俺のその言葉に対してますます笑顔を深めるシーリー。

「昨日面白いお方を見つけまして。」

「お前が興味を引くほどか？」

思わず、俺は書類から目を離して、シーリーを見てしまう。

このシーリーという男を俺自身あまりよく知らずにいる。

有名な貴族の名を受け継ぎ、騎士としても優秀、しかし出世欲はなく、自分への評価に対してあまり関心を持っていない。

同僚との争いなども軽く受け流すために問題を起こすことなく、部下からの信頼も厚い。

だからこそ自分の妹の護衛につかせているのだが、一方で俺を恐れ

てるような態度は一切なく、なにを考えているのかいまいちわからないといった不気味さも兼ね添えている。

決して自ら目立とうとしないシーリーが今回、王に后候補の女を紹介するということは、今までの態度からみても少々違和感を感じるのだが、それが逆に、その女への興味を強くする。

「それで？どこの令嬢でどんな人なんだ？」

「それがだれなのかわからなくて。とにかく、剣術が強いんですよ。あの剣さばきには惚れ惚れしました。鍛錬しにいく途中だったみたいなので訓練所に行くよう誘って、一緒に鍛錬しました。一応后候補であることは伏せて訓練所に行きましたんで、その時居合わせたものたちは、彼女が后候補であることに気づいてはいないようです」

「ちょっとまで。」

一体なんの話をしているのだと頭を抱えなくなった。后候補の話だったのにどうして、名前はわからないが剣術が強いとかいう話になる。

だいたいなぜ訓練所に誘った。

いろいろと突っ込みたいのをおさえ、俺が一番したい質問をいう。

「本当に后候補なのかその者は？」

「はい、後宮の方からドレス姿で侍女と歩いてました。一般的な茶

色の長い髪で、綺麗な方でした。」

なんと不可解な話だろうか。女性が剣術を学んでいることにたいしては、この国に女性の護衛兵もいるため特に驚くことではない。しかし、シーリィーがすごいというならば本当に剣術は強いのだろうか。

ある意味俺はその女に少しだけ興味を持ったが、いかんせん名前すらわからない。

本気で調べようとするのならすぐにみつかるであろうが、あいにくそこまでの興味はなかった。

ただ、面白い女性もいるものだ、と頭の片隅においたのは確かだ。

その様子にニヤリ、と笑みをますます深めたシーリィーを、書類処理にもどった俺が気づくことはなかった。

第十五話 レンゲルドの答え

彼がくる。

宰相にその情報を教えられたとき、俺は思わず身震いしてしまった。

彼はいった。

「シユバルテイ帝国の貴族の誰かが、違う国と婚約を結ぶことによる混乱を考えたことはあるか」と。「その意味を理解したと思う頃に、またこの国を訪れる」とも言われたのだが、彼がこの国にくるといふことは、頃合がきたということだ。

この何年もの間、ひたすら彼女のことを考えて、がむしゃらにやってきた。

そう、全ては彼女のため、そして彼女との橋をもつ彼に己とこの国を認めさせるため。

今回の訪問で、全てが決まる。

俺は妙な確信をもっていた。そしてそれは見事に当たっていたのだが、結局は全て彼　　ルドヴィーリー殿下によって巧妙に仕掛けられていたのだと気づくのは、そう遠くない未来のことであった。

今宵は后候補のための最大の夜会が開かれる。彼女らはあと三日もすれば帰ることになるのだが、そのことに対して十分焦っているらしい。

結局ほぼすべての后候補が、あまり王に接近できず、親しくなる機会もないままにきてしまったため、今日に賭ける情熱は各々素晴らしいモノがあった。

どこもかしこもキラキラとされていて、逆に煩わしい印象を受けるが、后候補たちがいるのもあと三日。その三日を乗り切れば、またあの懐かしき静けさが戻ってくる。

そしてなにより、俺は夜会よりも重要な謁見があったために、正直あまり夜会を気にする余裕などない。

というかわざわざ忙しい夜会当日の、しかも夜にルドヴィーリー殿下はおとずれるというので、周囲のものたちはその準備に追われ、城の中は騒々しいものとなっている。

ルドヴィーリー殿下が訪れるという情報が、どこからか漏れたために、今回の夜会で今だ独身であるルドヴィーリー殿下の目にとまるうとする者たちもいるようだ。

しかし、そんなことはどうだっていい。

今夜が、勝負だ。

「やあ、久しぶり。今夜は夜会だって？忙しいときにすまないね。」
まったくそんなことを思っていないかのように軽やかに笑い、くだけた言葉で話す彼。

「いえ、ルドヴィーリー殿下には、わざわざ越しただき、お話を承ることに關して、大変光榮に思っております。」

「君の父上は元気にしているかい？病気が回復にむかってきているようだと言ったのだけれど。」

「はい。ここ数年静養していたことが幸をそうしたのか、徐々に回復に向かっており、私としても安心をしております。」

なかなか本題にはいかない。しかし、焦ってはいけないと自分に言い聞かせる。

あの時のような失態は犯したくない。そう思った矢先に、いきなり爆弾はきた。

「で、まだ彼女のことは好きなの？」

顔はさっきと変わらず笑顔のまま、彼は問い詰める。

いきなりの言葉に、一瞬口を紡ぐが黙っているわけにはいかないと、俺は口を開いた。

「はい。俺は彼女以外を后にするつもりはありません。」

今回の催しに関しての俺の意思を伝えるためにも、この言葉は言わなければならないと思っていた。

今回后候補を集めたことで、彼女を諦めたのだと思われてはたまらない。

「君は、シュバルティ帝国の貴族が、この国の王と婚約を結ぶことによる混乱をどう抑える?」

ああ、ついにきた。

この言葉は長い間俺を縛り付けてきた。

この言葉は俺が外の世界へと視野を広げるきっかけとなったもので、俺自身と、この国、ヴィングリー国を見直すきっかけとなった言葉。戦争に勝てたのも今のおれがいるのも全てはこの言葉から始まったのだとしみじみと思う。

このときのために、俺はいままでがむしゃらにやっけてきたのだ。

今までの努力が後押しをするかのように俺は自信をもって答えた。

「俺の全人脈と、他の国とのつながり、そして俺自身とこのヴィングリー国全てをもって彼女を守ります。」

「……それはそれは、大きいことをいったねえ。」

目を軽く開きながら笑顔は消え、真剣な表情へと変わっていくルドヴィリー殿下。

重苦しい威圧感が殿下から醸し出されるが、俺はひるむことなく殿下を見つめ続ける。

「彼女を守る、か。それは混乱よりも彼女を優先するという事なのか？最悪ルドヴィリー国に陰ながら襲撃をする国も出てくるかもしれない。そんなとき、シュバルティ国は彼女を優先に助け出す。平等の名のもとに我が国はこの国を見捨てるかもしれない。それなのに彼女を優先的に考えていいのか？」

たしかにそうかもしれない。

シュバルティ国は偏つてはいけない平等の国。身内ならば全力で助けるが、それ以外はけっして鼻屑できないのだ。

しかし、俺の信念の中心にいるのはこの国ではない。彼女だ。

もちろん、この国は好きだ。家族も、この国の民も守りたいと思う。

しかし、どうしても彼女は特別なのだ。そう、この国よりも。だからこそ、俺はどちらか守れるように国をつくりかえてきたのだ。

「……この国は、彼女を守れるように私が今までたくさんの事業、自衛を手がけてきました。彼女を守るための国に、俺がしたのです。だから、彼女を守ることのできるこの国を俺は守る。彼女がこの国で安心して暮らせるよう、この国の敵はこの俺自身が全力で相手をする。この国を危機に陥れなど、させない。」

思わず、熱が入りすぎたのか、敬語も忘れ、自分のことも俺などと、ルドヴィリー殿下の前で言ってしまった。

殿下は真剣な表情で俺を見る。

沈黙があたりを包むが、これが、俺が数年をかけて導き出した答えだ。

第十六話 レンゲルドの愛の始まり

「うん合格!」

それは突然の宣言であった。

真剣な表情はどこにいったのか、にっこり笑っていった殿下の言葉に思わずぼかんとしてしまう。・・・合格？

「いやあ、まさかここまで彼女に依存しているとは俺としても予想外だったなあ。まさか国ごと変えてくるなんて思ってもみなかったよ。彼女を守るっていつても、僕直々に剣術とかを指導したから、彼女が簡単にやられたり、誘拐されたりすることはないと思うけど、まあ君も相当強いってきいたから彼女を守ってやってよね。あの子には自分のことは自分で守れと言いついて聞かせてきたから守られることに慣れていないと思うんだ。」

口をはさむまもないままにマシンガントークを繰り広げる殿下に俺は、回らない頭を必死に回転させようとしていた。

つまり、俺は彼女に結婚を申し込んでいいと認められたのか。

彼女を、後にできる権限をもらったのか。

自覚のないままに、殿下へ目をむける。すると殿下はにっこりと笑顔を向けたあと

「まあ、結婚を申し込んだところで、簡単にはいくはずないんだけどね。」

といた。

その言葉に、思わずぐっと口を噛み締める。

冷水をかけられたかのように、浮かれた気持ちはあっという間にしぼんでいく。

それは、当たり前のことなのかもしれない。

彼女が結局誰なのかはまだ掴めていないにしろ、シュバルティ国の人間だ。

そう簡単に他国の者と結婚など出来るはずがない。

それがたとえ、他国の王としても。

浮かれた心を落ち着かせるかのように、冷静に物事を考える。

けっして焦ってはいけない。

これは長期戦なのだ、自分に必死に言い聞かせる。

そう、これまでと同じように、衝動を我慢し、暴れ狂う気持ちに蓋をして……。

そう、冷静になろうとしていたところで、殿下はあざ笑うかのよう
に最大級の爆弾を放った。

「彼女、実は后候補でここに来ているんだよねえ。」

頭が、今さっき以上に真っ白になる。

そして、激しい衝動が雄叫びをあげるかのごとく全身を包む。

彼女がいるだと？

ずっと、ずっと焦がれて焦がれて、身が張り裂けそうなほどに会いたかった彼女が、ここにいる？

「だから、これは俺からの最後の課題。彼女を、見つけてあげて。そしたら、彼女との結婚を俺が国にすすめてあげる。いい話だと思わない？王弟殿下の口添えだよ？」

王弟殿下の口添えとの提案に、びっくり、と体が反応する。

「彼女が……ここに？」

「うん、そう。だから、彼女を無事見つけることができたなら、結婚の口添えを約束するよ。僕は約束を破ったりしないから安心してよ

ね。
「

彼女との結婚が急に、鮮やかに、目の前を彩る。

もう、我慢しなくてもいいのだろうか？

いや、もう、我慢できない。

リミッターが振り切れる音が、どこからか聞こえたような気がした。

地をけり、扉を蹴破るように開き、廊下を駆ける。

彼女が、彼女がいるのだ！！

もう、冷静になるなど今の俺には到底無理な話。

この浮き立つ思いはスピードを増し、加速してゆく。

体が燃え上がるように熱い。

何度彼女を思い描いただろうか。

何度会いたいと願っただろうか。

たった一度の逢瀬でなにをいうといわれるかもしれない。

しかし、そんなもの関係ない。

俺は自分の片割れに出会ったのだ。出会うことができたのだ。

それは、奇跡だと常日頃思ってきた。

一体この地に生きるものたち数十億人の中から、どれだけの者たちが、片割れとも言える運命の人に出会うことができるのであるのか。

彼女を思うだけで狂いそうになる。

いやすでに狂っているのかもしれない。

この熱を宿させるのも、この衝動を癒すのも彼女でしかできない。

長い廊下にイライラしながらも、頭の中では、先日のシーリーリーとの会話が浮かんでいた。

后候補の中に水色の髪などいなかった。そうになると、彼女は髪を染めていたのだろう。

そして、ルドヴィーリ殿下が直々に剣術を指導していたという事実から、シーリィーが褒めたたえるほどの剣術を持つ茶色の髪の女性が、なんとなく彼女につながっているような気がしてくる。

もし、その女性が彼女だったとしたら、あまりにも出来すぎているだろうか。

なんにせよ、まずはその女性をみつけなければならない。

少しでも彼女につながるものがあるならば、たとえほんの小さなことであろうと見逃すことは絶対にできない。

この半端ないほどの執着心は、俺が今まで培ってきた中で、一番といえるかもしれない。

そして、この執着心のおかげで、彼女に会えるのだとしたら、ここまで俺が育つきっかけをあたえてくれた殿下には感謝しなければならぬ、と苦々しい表情を浮かべつつも考える。

というより、この数年で風貌は変わったにしろ、髪を染めた程度で彼女に気付かなかった自分を殺してやりたい。

どがあん！という音と共に、俺は夜会が行われている会場のドアを開けた。

敵かで、キラキラと輝くものたちには一切目を向けず、吹き出す汗も、荒い息も気にかけて、ただひたすら茶色の髪の毛の女性を探す。

当たりを見渡すと、たくさんの茶色の髪の毛が目に入った。

この茶色の髪は、我が国でも、他の国でも主に一般的といわれる色なので、后候補の髪色の中で一番多い色ともいえるだろう。

思わず舌打ちを打ちながらも、体は休めることなく、彼女らの顔をひとりひとり探して見ていく。

曲も止み、誰一人動かず、静かになったことすらまったく気づかずに、俺はただただ目を周囲に巡らせる。

誰もが、俺を見ていた。

こちらに体を、顔を向けているために、俺としても探しやすい。

そんな中、俺はふと、なにかに引き寄せられるように背後を振り向

く。

それは本当に、何気ない思いつきであった。

ただ無性に、後ろを振り返りたくなつたのだ。

別になにかを期待していたわけでもなかった。

彼女をみつけることへの確証はもちろんあつたが、後ろを振り向こうというその衝動は、本当に何気ないものだった。

すると一人だけ、こちらに背を向けて、扉へと歩いていく女性があった。

髪は一般的な茶色で、ドレスも他の后候補に比べると、あまり印象に残らないような色をしている。

こちらを、振り向いてはくれないだろうか。

俺が走つていき、顔をのぞけば早く確認できるというのに、体は固まったように動くことなく、足は地面にはりつけられたようだ。

願うように、恋うように、俺は彼女を見続けた。

振り向け！

そう、強く思った瞬間、彼女は、誰かとぶつかり、体を大きく揺らしてしまふ。

こちらを完全に見ることはなかったが、顔が半分だけ、こちらにみえる。

その顔が見えたと同時に、おれは力いっぱい走り出していた。

扉の奥にはちょうどルドヴィー殿下がいたのを確認し、一度だけ視線を送ったあと、目の前の彼女を強く、強く抱きしめた。

息がひゅっとなるのを聞いて、彼女の吐息をきいて、俺は感激のため息をもらす。

ああ、彼女だ。

俺の腕の中に収まる彼女は、華奢で、突然のことに体が固まってるようだったが、それすら愛しいと、感じた。

勢いのままに、彼女を抱える。もちろんお姫様だつこというやつだ。そしてその体制のまま、俺はルドヴィリー殿下を見すえて、堂々と宣言した。

「ルドヴィリー王弟殿下、これで約束を果たしていただけますね！
！」

俺はいま、自分がどういう顔になっているのかまったく分かっていなかった。

約八年ぶりにもなる、心からの笑顔を出しているとはまったくもって気づくことなく、俺はただただ胸を熱くさせていた。

そう、俺は今、やっと彼女を手に入れることができたのだ。

第十七話　そして二人は

現在、レンゲルドとシルヴィは城の客室にルドヴィリーとともにいた。

レンゲルドとシルヴィは向かい合うように座り、それをルドヴィリーは横から見ているかのような構図になっている。

ついさつきまでレンゲルドは夜会が行われていた会場にてシルヴィを横抱きにし、シルヴィに熱い視線をおくっていたのだが、事態の収集に動いたルドヴィリーと宰相のロンフィルによって、この部屋に連れてこられたのであった。

ルドヴィリーは彼らの観察をしながら、この面白い状況をどう解説すればよいだろうかと爆笑したい気持ちを必死に抑えていた。

まず、シルヴィは、熱があるのではないかというほど、顔が火照り、白い肌をバラ色にそめている。

無表情、鉄仮面と言われていたことなど吹き飛ばすかのように大変可愛らしい顔になっているのだが、シルヴィはまったくもって気がついていない。

レンゲルドを見たいのだろうが、直視するのが恥ずかしいらしく、レンゲルドの顔の下の服にばかり目をさまよわせている。

そしてレンゲルドはむしろルドヴィリーの存在など無視するかのように、シルヴィだけをまっすぐ見据えている。

その目はただひたすらに愛しいという愛情のこもった目をしており、シルヴィのバラ色の頬に今にも唇を押し付けそうだ。

というより、今この部屋に二人きりにした場合いまにもレンゲルドはシルヴィに飛びかかりそうなのである。現に愛情のこもった目には欲望も見え隠れしているのが、同じ男であるルドヴィリーには分かっていった。

なんとなくだが、飛びかかったとしてもシルヴィが拒絶するのをなんとなく懐柔した上で、じっくりとねちっこく愛を囁き洗脳し、まるで合意のようにやることやっつけてしまいそうな気がする。そして既成事実とばかりにルドヴィリーの約束と合わせて結婚をどうどうと申し込むであろう。奴はやる。必ずそこまで徹底的にやる。

お前は肉食獣か、今は待て状態で我慢しているのかと、突っ込みたい気持ちがあるので、所詮ルドヴィリーの想像なので、心の中で盛大に笑っておく。

彼らは二人だけの世界を作り上げており、ルドヴィリーにしてみれば、僕はここに居ない方がいいのでは？とも思うのだが、彼らはまだ、お互いに両片思いであることを知らない。

この状況になるまでに長い年月をかけてセッティングしてきたルドヴィーリイにしてみれば、今更手を抜くことなどできない。というより、やっと苦勞して彼らを引き合わせることができたのだ。この面白おかしい状況を見ずにしてどうすると開き直る。

そして、八年前から彼らを最高の形で引き合わせるための工作をしてきた同志たちに、この状況を報告してやらねばならないと、にんまりとした笑顔を出しながらルドヴィーリイは考えた。

通称、彼女らを見守る会と呼ばれる団体は小規模ながらも様々な者が入り乱れている。

その代表格がシュバルティ国の王弟殿下であるルドヴィーリイ、シルヴィの母でありシュバルティ国王の後であられるルキニア様、そしてこのヴィングリー国の宰相のロンフィル、王都騎士団のシーリー、シルヴィの侍女であるアンナが挙げられる。

もちろん発足した瞬間は彼らが恋に落ちた瞬間で、その直後にルドヴィーリイは、ヴィングリー国の宰相であるロンフィルに話を持ちかけた。

レンゲルドにシルヴィのことは一切教えるな、知らせるなという指

示を出し、シルヴィを謎の女として、レンゲルドの中に印象づけようとした。

大抵の男は、シュバルティ国の姫だときくと、野心家になるか厄介事はゴメンだと尻込みして身を引くからである。

ルドヴィリーは、シルヴィの初恋をできうる限り実らせてあげたかった。

それはルドヴィリー自身が体験した過去がきっかけともいえるのだが、ただの親ばか（シルヴィは姪だが）ともいえる。

まあレンゲルドの執着が思ったよりも強かったのには驚いたが、この調子でいくなら無事に結婚までいきつくであろうとルドヴィリーは考える。

「それで？お二人とも、そろそろ僕の相手をしてくれませんか？」

はっとするように視線をルドヴィリーに向ける二人。本気でお互いにはしか目がいていないようだった。

「君たちはどうやら一度どこかで会っているみたいだね。お互い認

識もあるみたいだし、二人がいいのなら、婚約を結んではどうか？シルヴィーはもともと后候補として来ていたのだし、特に不思議ではないと思うけど。」

自分は会ったことを覚えているが、相手はきつと覚えていないだろうという考えが両者の頭の中に浮かぶ。

しかしながら婚約という言葉聞いたとたんシルヴィは思わず仰天してしまった。

まさかそこまで話が進むなどシルヴィは思ってもいなかったのである。

「そんな！急にいわれてもレンゲルド様に迷惑がかかります。」

顔をさらに真っ赤にさせて、必死に動揺を隠そうとしているが、まったく隠されていない。

その様子にレンゲルドはといえはますます愛しさを募らせているのだが、シルヴィはいっぱいっばいで気付くことはなかった。

シルヴィは自分の初恋を叔父が叶えさせようと、レンゲルドに無理やり圧力をかけていると思っっているようだ。

違うんだけどなあと思っっていると、レンゲルドがシルヴィに語りかけるように言葉を紡ぐ。

「迷惑などといわないでください。私はあなたと婚約が結べるので

したら喜んで行いたい。もちろん、あなたが嫌でなければの話なんですが。」

「そんな……嫌だなんて思うはずありません。」

どこの出来立てカップルだと、砂を吐きたくなるのをルドヴィリーは必死にこらえた。もちろん、爆笑したいのもこらえた。

どうやら、遠まわしではあるが、お互いに婚約の意思があるのは伝わったようだ。

お互いの思いを伝え合うことなど、これからいつでも出来る。今無理やり伝え合うことはないだろうと、ルドヴィリーは思った。

これまで八年もの長い年月をかけて、片思いを温めてきた彼らだからこそ、ゆつくりとしたペースでその年月分の愛を語っていくほうがいいだろう。

お互いを見つめ合う二人をルドヴィリーは端からみながら、そろそろこの硬直状態から動き出さねばと、腰をあげる。

もちろん、そのルドヴィリーの様子に二人が気付くことはなかったため、

「とりあえず、そろそろ休まない?。」

もう夜中だし、夜会もそろそろお開きになりそうだよ?

とルドヴィリーが話しかけると、二人は夢から覚めたかのようにはつとし、ルドヴィリーに目を向けた。

「ほら、また明日ゆっくり話したらいいんじゃない？」

と提案するも、二人はなかなか頷こうとしない。

どちらもまだ、離れがたいような気をだしていたが、ルドヴィリーの提案を無下にするわけにもいかず、シルヴィにもすっかり休んでほしかったレンゲルドは、搾り出すような声で、シルヴィに声をかける。

「では、また明日お会いしましょう。ゆっくりと、おやすみください。」

「……はい、レンゲルド様。おやすみなさいませ。」

そのレンゲルドの表情は、まるで体中を引き裂かれるかのような苦痛に満ちた表情をしており、一方のシルヴィも無表情の顔の中に、切ない感情が見え隠れしていた。

結果的に、やっと会えた二人を離すようなことになってしまい、そろそろ休もうと提案しただけなのにまるで僕が悪者のようだ……。とルドヴィリーが思ってしまったのも、無理はないと思う。

後宮の部屋へと帰るシルヴィを送れるところまで送り、後宮の前で待っていた侍女のアンナにシルヴィを任せたと、ルドヴィリーはこれから行うべきことを頭の中で考える。

いろいろとやることはあるものの、とりあえずはミッションクリアの報告を「彼女らを見守る会」のメンバーにしなくてはならないなあ、とルドヴィリーは心の中でウキウキとするのであった。

第十八話 夢か真か

「なあアンナ、私は今、夢の中にいるのだろうか。」

ほんのさっきまで自分の瞳に写っていた彼はもうここにはいない。

ぼんやりとした表情を浮かべながら（端からみれば、いつものシルヴィの顔と変わらないが）シルヴィはふわふわとした思考のなかで、そっと呟いた。

八年ぶりに、いやこんなに近くから顔を見たのは初めてかもしれない。

といっても、恥ずかしくてほとんど見ることはできなかったのだけれど。

惚れ惚れするほどの精悍な顔つきと、バリトンの低い深みのある声、がっしりとした体つきには礼服の上からでもわかるほどの色気がただよい、シルヴィはくらくらと色気に酔いそうになる自分を感じていた。

八年前の顔の名残はたしかに残っており、あるときからすでに美少年であったことから、このような成長をとげることがは約束されていた。

たよつなものであったであらう。

そして変わることのない深い蒼色の髪と眼は、シルヴィを八年前からずっと捉えて離さない。

さっきまでのことがまるで夢のようで、もし本当に夢ならば、そろそろ冷めてくれないと本気で困る、とシルヴィはため息をはく。

レンゲルド様に会いたいと、願わない日はなかった。

けれど、自分の立場もきちんと理解はしているために、かなわない夢だと当に諦めていたのだ。

この八年間を改めて振り返ってみたとき、どこかで奇跡が起こるのを待ちながら、結局自分は何もしていなかったのだと気づいた。

自分が動かなければ、なにもかわりはしないというのに。

「あらあら。夢ではありませんよ、シルヴィ様。ついさっきまで、あなたがレンゲルド王のもとにいたことは、このアンナが証明いたします。」

ニコリと、長年自分のそばで見守ってくれていたアンナがそういったのを皮切りに、夜会から今までのことが一気にシルヴィに襲いかかってくる。

きついほどに抱きしめられ、熱い吐息を首筋に感じたことも、あの逞しい腕が私の体を絡めとり横抱きにしたのも、太陽のような笑顔を再び間近でみる事が出来たのも、全て、夢ではないのか。

その瞬間、シルヴィ羞恥のあまり倒れそうになるのを必死に我慢した。

ぶわわわっと赤くなった顔は、日頃無表情を貫くシルヴィにとって大変貴重なものであるが、その様子にもアンナはニコニコしたまま、特に騒ぐことはない。

ああ、なんとという経験を今夜はしてしまったのであろうか。

「わ、私はなにか失礼なことをしていないだろうか。礼儀作法は、とれていただろうか。」

あまりのパニックに陥り、おろおろとしだすシルヴィ。
それをアンナは愛しそつに見守る。

すると突然なにかに気がついたように、シルヴィははっとした顔になり、その後盛大に落ち込みだす。

今にも泣き出しそうな声でなにをいいたすかと思えば、

「横抱きに・・・されたぞ。私の体は重くなかったであろうか。ただでさえ筋肉で重いのに最近では鍛錬もできていなかったから絶対に太っていたぞ。」

ああもうなんて可愛らしいのかしら！と、アンナは顔を微笑ぐらいに抑えながら、握りこぶしをひっそりとつくり、心の中で盛大に叫ぶ。

シルヴィは気づいていないだろう。

もしこの様子をレンゲルドがみたならば、シルヴィをおもわず抱きしめて、横抱きにし、寝室までつれていってからデロデロに甘やか

すであるということ。

へたすれば「羽のように軽い」などといわれ、証明するために（というよりレンゲルドがただしたいがために）城の中をシルヴィを横抱きにしたまま案内されるであろうことに。

少しぐらい、浮かれてもいいのに。とアンナは思う。

この八年間一途に想い続けるシルヴィを見てきたからこそ、今夜の出来事に関しても少し前向きに考えればいいものを、と多少は歯ぎしりせずにはいられない。

もし、ほかの娘であったなら、今夜のレンゲルド王の様子をみれば、自分が愛されていることなどすぐに気がつくであろう。

まさか、と思いながらももしかして、という期待を消すことなどなかなかできやしない。

それが普通の反応であり、今夜のレンゲルド王の態度は期待してもいいほどの溺愛ぶりであったといえよう。

けれど、シルヴィはけっしてそのような期待を持つことをしない。

ただひたすら彼を想い続けていたからこそ、そのような恋愛に発展することまで考えたこともないのだ。

婚約にしても、自分が恥をかかないようにその場限りでやんわりと是といってくださいだったのだ・・・などとシルヴィは思っているに違いない、とアンナは頭を悩ます。

願わくば、なにこともなくレンゲルド王との婚約、そして結婚がすみやかに行われますように。

シルヴィ様を相手に愛を囁くには、まず外堀を埋めないと難しいかもしれませんよ？といつかレンゲルド王にいつてやらねばならないなあと思いつながら、今だ、パニックになりすぎてふらふらしているシルヴィをしっかりと愛でるアンナであった。

そして一方、後宮の中のある部屋では、后候補としてこの国を訪れるシルヴィになにかとちょっかいを出していたあの二人が、憎悪に顔を醜く歪めながら密談を行っていた。

彼女たちは不思議で仕方なかった。

なぜ、王はあのような、みすばらしい、目立ちもしない女を選んだのか。

彼女たちは自信があった。

それぞれ、父親に王を虜にしてこいといわれ、正妃の座を当然とるつもりでここまでやってきた。

つい最近まで自分の国と彼の国が戦争をしていたことなど、彼女らにとってみれば、なんの障害にもなりえなかった。

どうせ、自分をみたら、王はたちまち虜になってしまっただと疑いもしなかった。

だって今までずっと男たちはそうだったのだから。

自分になびかない男など誰一人いなかった。

王の顔がどういったものなのかは、今まで敵国同士であったためにみたことはなかったが、まあ、自分の仕事は王を自分に溺れさせることなのだから、どうでもいいかと考える。特に興味などなかった

のだ。

その考えが変わったのは、彼を、王を初めてみたとき。

あまりの美しさ、気高さ、そして荘厳さに息が止まるかと思った。

あの無表情の顔が、愛しいものをみるときはどう変わるのであろうかと想像するだけで、胸がはちきれそうになった。

その表情が、もし自分に向いたら。

彼女たちの目標は、王を溺れさせることから、王に愛されることにかわった。

彼が自分に溺れる姿もみてみたいが、まずはあの表情が柔らかく変わる姿をみたい。

そして、包容力のある体で自分を包み込んでもらいたいと、恋を夢見る少女のように胸をときめかせた。

結果的に、彼の表情が柔らかく変わる姿をみることはできた。

包容力のある体でしっかりと抱きしめる姿もみることができた。

本来ならば王の側近でさえ最近は見ることの叶わなかった、彼の輝かんばかりの笑みも、見ることができた。

ただし、その表情がむけられた相手は自分ではなかった。

この後宮に来た時から、自分を最大に苛つかせる存在に、その眼は、その表情は向けられていたのである。

そんな滑稽な事態を目の当たりにして、だれがこのまますごすごと祖国に帰れるものかと、彼女たちは怒りを、あのみすばらしい女に向ける。

なぜ、自分たちを尻目にあの女なのか、王に直接問いかけてみたかったが、そんな真似は死んでもしたくなかった。

そのような行動をすることはあの女に負けを認めることになりそうで、プライドの高い彼女らは耐えられなかったのである。

そして彼女らは思いつく。

あまりにも滑稽で、幼く、バカバカしいほどの企みを。

彼女らの表情が夜会から帰って初めて、晴れやかなものへと変わっていったのを、そばで見守る侍女はただただじっと、見つめていた。

第十九話 朝の騒動

朝、朝食の時間となり食事を行う場所にシルヴィがいくと、后候補の女性たちが一斉に自分のほうへ視線を向けたのを、シルヴィは感じた。

嫉妬と憎悪、そして物珍しいかのように観察する目が少々といったところか。

彼女らの殺気ともいえる視線にシルヴィは、この人たちなかなか武術の見込みがあるんじゃないのかと、検討違いなことを考えずにはいられない。

逆をいえば、それほどまでに彼女らの視線は武術的にいえば素晴らしかったのである。

ただまあ、こんな視線を浴びたところでシルヴィはへこたれることもないために、彼女らはますます悔しさを募らせるのだが、シルヴィにとっては知る由もないことであった。

縮み上がる様子もなく、ただ淡々と食事を行うその様子は、端から見ると王に唯一選ばれた女としての余裕のように感じられる。

それはシルヴィ自身が選ばれたなどと思ってもしていないからこそその行動であるが、后候補の彼女たちに与える影響は多大なものであった。

やはり、王に選ばれたのだ。婚約をもう結んだのではないか、いやあのような低い身分の女など、王はすぐに飽きられるだろう、などと、ひそひそと話を行う彼女らの心の中にあるのは、自分よりも地味で、身分も低い者に負けたという屈辱のみ。

そして、明日までに王の目に止まらなかつたら、自国へと帰らなければならぬという崖っぷちの焦りも、彼女らにはあつた。

嫉妬をする暇があるのなら、王に少しでも話しかけるチャンスを見取ることが生き残る道だと、彼女たちは次々に部屋へと戻っていく。

どうやらお色直しをしたあとに城中をまわるようで、今日は一段と城の中が賑やかになりそうであつた。

そんな中で、自分を観察する者たちがいることを、シルヴィはすぐに気がついた。

一際殺気の濃度が濃ゆいことも気付く要因の一つであつたのだが、彼女たちがそれを隠しもしていないことから、こちらが気付く筈もないと油断しているか、挑発のためにしていると考えられる。

シルヴィとて、昨日の騒動が后候補の者たちにどのような影響を与えたのか、理解はできている。

ただ、そのような殺気を込められるほどだいそれたことはしていないし、進展などもみられる訳がない。どうせ自分も明日帰るのだからと考えると、胸がちりちりと痛み出すのだがシルヴィはそれに気づかないふりをした。

昨日のことは夢をみれたのだと、自分に言い聞かす。叶うはずのなかった夢が偶然叶ったのだと思うしか、他に対処しようがないのだ。

食事をし終わり、部屋へと戻る途中にシルヴィはふと、庭園にいきたくなくなった。

この国の庭園はなかなかの見ものだと言われてももらっていたのだが、庭園に行くためにはあの修練所をとらなければならぬ。

自分の身分をさらに偽って、騎士見習いとして修練に参加してしまい、予想外に注目を浴びてしまったシルヴィにしてみれば、このドレス姿を彼らに見られることになにかしらの抵抗があった。

なによりも、嘘をついたまま彼らの修練に参加してしまったために、妙な負い目をシルヴィは感じていたのである。

そしてそのことを考えると、自分が身分を偽ってここに后候補としてきたこと自体非常識すぎると再認識してしまうためにますます落ち込んでしまうのであった。

もちろん、シルヴィの家族公認であり、それはいわばシュバルティ国公認といってもいいために、シルヴィは家族の暴走を止めることのできなかつた自分に対しても密かに落ち込む。

とりあえず、その負い目やら抵抗やらで彼らに見つかりたくなくなかつたシルヴィは、修練所はもちろんのことその場所一帯、ずっと近づ

くことすらできなかった。

しかしながら、今日はもう最終日である。

今まで他国に行ったこともなく、そしてこれからも気軽に他国に行くことなどできないだろうと想像できるために、シルヴィは悔いがないよう今日一日を過ごしたかった。

どうせ明日帰るのだからと、シルヴィは半ば開き直る勢いで、アナを連れて庭園へと歩いていく。

庭園の場所がはつきりとはわからないために、とりあえず大体教えられた場所に向かって歩くのだが、長い廊下を渡り、後宮からどんどん離れていくことにドキドキと鼓動が高鳴る。

来たことのない場所に、風景、その全てがとても新鮮で、まるで冒険をしているかのようなワクワク感があった。

幼い頃、初めて城下町に降りた時のことを思い出しながら、久しぶりの感覚に顔もほころんでいく。

しかし、そんな穏やかな気持ちもある叫び声によってぶち壊されてしまった。

「あー！！！！あのとのおつよいお姉さま！」

ああ、この声は・・・とおそるおそる振り返ると、そこには満面の笑みを浮かべた、レンゲルドの妹でありこの国唯一の姫がいた。その後ろには同じく微笑を浮かべたシーリーリーの姿も。

「これはヴィヴィルナ姫様、久しぶりです。シーリーーさんも。」
無表情なりにもできる限り優しく話しかけると、ヴィヴィルナはますます目を輝かせ、怖がることなく話しかけてくる。

「わたしのことはヴィヴィってよんでくださいね。ヴィン兄様はりゆうがく中だし、レンゲルド兄様はいそがしそうだし、ほうっておかれてさびしくって。だからお姉さまにあえてうれしい！」

シルヴィの妹とは正反対とも言える活発な性格に、少しだけ目を見張る。

シルヴィの妹はどちらかというと、一人で本を読んで遊ぶような静かな子なので、そのように元気な女の子を相手にするとまどいも大きいのだが、その満面の笑顔からパワーをもらえるようで微笑ましくもあった。

これほどしつかりしていながらまだ8歳だというから驚きだ。

しかしまあ、それはそれとして。

「なぜ私のことをお姉さまとよばれているのですか？」

ヴィヴィルナに会った時から思っていた疑問をシルヴィはなげかける。

そう、なぜか、ヴィヴィルナはシルヴィに会った当初から、シルヴィのことをずっとお姉さまとよんでいるのだ。

「だって、お姉さま、私の理想のお姉さまなんだから。つよくて、きれいなのかっこよくて、私がほしかった理想のお姉さまにぴったり！」

「い、いや、でもですね。」

一国の姫にお姉さまとよばれるとなると、ただでさえいまは色々と周囲に誤解されているのに、ますます事態がややこしくなるというか……。

少しばかり顔を歪めながら、諭すようにヴィヴィルナに話しかけると、ヴィヴィルナはたちまちしゅんとした顔になる。

「わたし、ずっとお姉さまがほしかったの。だから、理想のお姉さまにあえてうれしくて……ごめんなさい、めいわくでしたよね。」

悲しそうなヴィヴィルナを前に、うう……とシルヴィはなにもいえなくなる。

こんな状態の少女を前にして、お姉さまと呼ぶなどと誰がいえるだろうか。そんなことを言える奴がいたら直ちにここにつれてこい。

「い、いえ。迷惑だなんて思っていませんから。そう呼んでいただけなのでしたら嬉しいです。」

「ほんとう？お姉さまありがとう！」

ぱあっとたちまち顔が明るくなるヴィヴィルナ。その様子を見てシルヴィはほっとしながら、もう一人妹がいるとおもえばいいか。と、半ば諦めるように、承諾したのであった。

やはりヴィヴィルナは笑顔のほうがいい、と思いながら。

「シルヴィ様はなにをされておいでだったんですか？」

シーリィーがヴィヴィルナの後ろから、微笑を絶やさずに声をかける。

その問いにシルヴィは当初の目的を思い出す。

「ああ、庭園にこれから行く途中なんだ。」

シルヴィの言葉にヴィヴィルナが思わずといったように反応する。

「まあ、庭園はわたしのお庭のようなものですのよ。ぜひあんない

「させてください！」

そして、ヴィヴィルナの言葉におされるように、結局ヴィヴィルナとシーリーリーの二人が増え、四人で庭園鑑賞を行うことになったのであった。

このとき、シーリーリーはアンナと目を合わせ、なにもない場所にむかって親指を立てていたのだが、シルヴィはヴィヴィルナのおしゃべりに翻弄され気づくことはなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0035u/>

愛しいとおもう

2011年11月17日00時05分発行